

姫路城がまず目をひくが、高砂町と加古川の三角州の凝った表現も収録できるよう、城はあえて左端に寄せた。

姫路城下には文化二年(一八〇五)(第五次、紀伊・中国沿岸)、同六年、八年(第七次、九州第一次の往復)、同一〇、一年(第八次、九州第二次の復路)に足跡を残している。八年も新年早々だが、一〇、一年は年末に到着、新年をここで迎えている(一八一四年二月二十日)。

高砂から海岸を測り、藩の御船役所があつた飾磨津から城下に至らず往復するのが第五次、東南から城下を横切り、西に向かうのが第七次の往路。復路は北側の増位山隨願寺(この図では増住山隨願寺と表示、二月一日の「鬼追い」が有名)などを測る。姫路城下の測量は六年、八年が主体、天測は文化二年に行つている。城下に細かい測線は見えないが、日記には町名が細かく記録されている。

右上の法花山一乗寺には塔が美しく描かれている。五重塔に見えるが実物は三重。承安元年(一一七一)と建立年代が明らかで、日本最古に属する塔として国宝に指定されているという。隨願寺の南にある白岡神社は安産と育児の神様。城の北西方で、この図の枠から僅かに外れている書写山円教寺等々紙面は賑やかである。

一帯は低地の中に島状の孤立丘陵が点在する播磨平野(姫路平野、播州平野ともいう)、「播磨国風土記」には姫路市中心部の十四丘の神話の由来が見える。姫路城もその一つである日女道(ひめじ)丘の上にある。

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

鈴木 純子

目次 47号

巻頭 古来にも稀なる春を―忠敬試毫
話題

伊能大図総覧の地名と景観(一)

佐渡「伊能大図」の写本発見

シーボルトの地図は何処に?パウアー教授会見記

富士山の方位測定

伊能大図総覧刊行に!

猪突猛進―猪年の地名!

芳名録より 藤岡紫峰 加藤高明

特集 新春支部便り

能登半島に吹いた伊能忠敬の風

(特別寄稿)「群青の人」の周辺

わんからしんの実測体験 in 三条

伊能図探訪・太鼓谷稲成神社蔵図

春宵・一絵一句一筆

研究ノート

文化十年忠敬が遭遇した二つの別れ

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(四)

濱宅宮内家所蔵資料から(一) 見島絵図

伊能忠敬と会津街道 陶芸作品日展入選

伊能測量隊の経度の測定(二)

地域史料

久美浜に於ける伊能測量(一)

忠敬談話室だより

縁は異なるもの 首藤郁夫

今年之地磁気偏角解析 辻本元博

日々の話題 お知らせ

星塾 由尚 二

前田 幸子 六

前田 幸子 一〇

佐久間達夫 一四

編集 部 二一

齋藤 仁 二一

伊能 陽子 二二

河崎 倫代 二二

能美龍一郎 二三

山浦佐智代 三〇

石川 清一 三四

江口俊子 武川芳男 三六

杉浦 守邦 三七

宮内 敏 四〇

宮内 敏 四六

松宮 輝明 四八

佐久間達夫 六四

松田 昭二 五六

編集余話 編集 部 六三

「唐津街道」発刊 のび工房

数学するヒトヒト藤田宏さん

編集 部 七〇

古来にも稀な海峯松浦写

八十倍のけと

九列を絶ん

右 癸酉の歳旦

伊能忠敬試毫

忠敬試毫

こらいにも まれなるはるを まつらがた

やそしまかけて きゆうしゆうをへん

文化十(一八一三)年元旦

伊能忠敬記念館蔵

伊能大図総覧の地名と景観（一）

星 埜 由 尚

はじめに

1997年の国会大図、2001年のアメリカ大図の発見などにより、伊能大図の全貌が明らかとなり、伊能大図全集を作成しようと言う気運が盛り上がり、この12月に河出書房新社から「伊能大図総覧」を上梓することができた。筆者は、この計画から刊行までの一大事業に参画したので、その経緯を伊能忠敬研究会会員諸氏にご報告したい。

2001年に本会名誉代表の渡辺一郎氏がアメリカ議会図書館でいわゆるアメリカ大図を発見され、世間をにぎわしたのは記憶に新しいところだが、その後、これを国土地理院がデジタル化し、実物大の複製を作成して全国で伊能大図フロア展を開催し、多数の人々に見ていただいた。そのような中で、歴史民俗博物館や海上保安庁海洋情報部での発見もあり、筆者と渡辺氏との間で、伊能大図の全貌が見えてきた今、一つ伊能大図全集を世に問うべきではないかと話をするようになった。そこで、渡辺氏から河出書房新社に提案し、河出書房新社も積極的に引き受けていただき、渡辺一郎監修、(財)日本地図センター編著、河出書房新社発行というスタイルで事業化したわけである。

「伊能大図総覧」では、国会大図、アメリカ大図のほか、松浦史料博物館の松浦大図、山口県文書館の毛利大図、歴史民俗博物館の歴史大図、海上保安庁海洋情報部の海保大図からなる全国214枚の図を集大成し、併せて東京国立博物館の重要文化財「九州沿海図」21図葉と松浦大図の佐世保、長崎の図を参考図として収載した。総計237枚の伊能大図と渡辺一郎氏の「序」、鈴木純子氏の「伊能図の内容と構成」、渡

辺一郎氏の「伊能図の発見史」、筆者の「二百年前の日本の姿」、西川治氏の「伊能図の国際的な顕彰」といった解説がついている。また、伊能大図に記載されている国名、郡名、村名、山名、島名、岬名、河川名、社寺名などのすべての地名を整理し、図別、五十音順の索引を付けた。各図の読図による解説と併せてB4判246頁の別冊が付属している。別冊については、筆者が執筆した。

印刷作業は、日本写真印刷株式会社（京都市）で行ったが、伊能大図の選定については、さまざまな由來の伊能大図の中で最も優品と思われるものを選んだが、他の図に比べ加工度の著しい海保大図については他の図がないものに限定して使用した。印刷色の調整については、渡辺一郎氏、鈴木純子氏と筆者で京都まで出かけ、色校正刷りなどを確かめながら細心の注意を払って行なった。印刷において最も気を使ったのは、全体の色調もさることながら、測線の鮮明度、地名の判読可能性などであり、原本の復元に必ずしもとられず、資料としての判読性に重点をおいた。その結果、日本写真印刷株式会社の高精細印刷技術により、従来にない鮮明かつ上品な仕上がりになったのではないかと思う。

前述したように、別冊では、各図解説と地名索引を掲載し、これらについては、筆者が担当し、編集・執筆した。特に、地名索引の編集は、約三万九千に及ぶ地名を相手に格闘することとなった。また、各図解説は、伊能大図から読み取ることのできる景観情報に重点をおいて記述した。地名と景観について数回にわたって述べようと思う。

1. 伊能大図の地名の種類

伊能大図には、国名、郡名、村名、集落名のほか、山名、河川名、湖沼名、島名、岬名などのほか、社寺名、領主名、城主名などが記載

されている。これらは、測線の周囲に限られ、誤字・脱字等も見られるが、江戸時代後期1800年代初頭の地名に関する資料の宝庫であることは間違いない。

(1) 国郡名

国名は、国境に郡名とともに記載されているのが一般的である(アメリカ大図、国会大図)。同一国内では、郡境に郡名のみが書かれている。国会大図では、第90号(江戸)のように武蔵などと書かれた附箋が貼られている場合もある。これは模写時に貼付したものであろう。また、アメリカ大図の第75号(佐渡)、第191号(彦岐)、第192号(対馬)など島の図では、佐渡國、壹岐國、對馬國と大書している。国名や郡名に使用されている文字はさまざまで、たとえば伊勢國桑名郡の場合と柴名郡の場合とがある。地名索引においては、このような場合は異なる地名として扱った。

(2) 村名・集落名

村名・集落名は、すべての大図に測線に沿って記入されている。測線から多少離れた村名も多少見られるが、測線近傍に限定されている。これらの村名・集落名は、天保郷帳に掲載されている村とその枝郷(○)村枝×××などと記載されている)である。旧名や俗名が世日○○と併記されている場合もある。○○町と書かれている地名や町も村もついていない地名もあるが、どのように区別されたのか不詳であるが、それらは、現在でも比較的有名な地名であることが多く、商業機能も備わった大きな集落であったものと考えられる。また、宿駅の記号(朱○)が付けられているのもその様な地名に多い。

これらの村名には読みを付したが、その際、長野県地名研究所の滝澤主税氏が編集された「地名研究必携」を利用していただいた。「地名

研究必携」は、天保郷帳の村名を整理して、その後現在に至る村名の変遷をまとめたものであり、約六万の天保期の村名の読み方、明治22年の町村合併による村名の改変、現在の行政名を一覧表で知ることができる。滝澤氏は二十数年を要してまとめられたもので、大変な労作である。一般の書店等には並んでいないため、「知る人ぞ知る」であろうが、広く世の中に普及してほしい貴重な地名データベースである。滝澤氏は、独自のコード体系から成る地名分類法を考案され、2005年に「日本地名分類法」として世に出され、最近これを増補され、「日本地名分類法2006」として北海道・琉球を含めた天保郷帳地名データベースを完成された。関心のある方は、是非手にとってご覧になっていただきたい。伊能測量の業績に匹敵する仕事ではないかと思う。

(3) 山名

伊能大図には、山景が一種のデザインとして描かれている。しかし、顕著な山や有名な山はその実景がスケッチ風に描かれており、山名も付せられている。例えば、国会大図では富士山は富士山らしく美しく描かれている。また、山頂は交会法の目標となったから、測量された山には、その山頂に小さな朱又は墨の十字が書き入れられており(アメリカ大図)、山名が記載されている。

山名は、有名な山や現在でも同名の山はわかりやすいが、山名は地域により異なる呼称をもつ場合が多く、現在のどの山に当たるのか不明のものが多い。例えば、国会大図の第78号(渋川)には日光連山に当たる山々が描かれ、野苧山(やしゅうざん?)、中禅寺山、日光山などの山名が見える。おそらくそれぞれ現在の白根山、男体山、女峰山であろうが、必ずしも明確ではない。霧島火山や阿蘇火山を構成する山の名称も、地形図と比較すると必ずしも現在と同名でない場合もある。

り、山名の同定は難しい。

(4) 河川・湖沼名

河川は、伊能測量の及んだ場所にのみ描かれ、小河川に細かく名称が記入されている場合がある一方、大河川でも河川名が記入されない場合もあり、名称の記載は一定していない。河川名は、現在の名称とは異なっている場合も多い。

湖沼は、琵琶湖、浜名湖、八郎潟、宍道湖、猪苗代湖などの大きな湖が描かれ、湖名が大書されている。そのほか、小湖沼が詳しく描かれ、名称が付されていることも多い。特に、北海道の海岸に沿った潟湖が細かく描かれている。

(5) 島名・岬名

伊能大図には、島と岬の名称が詳しく記載されている。これらの名称は、現在も同一名の場合も多いが、異なる場合も多い。山名と異なるのは、現在の地形との同定が比較的容易なことである。特に、島は、小さな島まで測線が描かれ、岩礁まで記入されており、測量・調査の詳細振りには驚かされる。しかし、海岸の埋め立て等により現在は消滅している島も多い、地名でそれと知られるばかりである。

(6) 社寺名

伊能忠敏は、信心深かったと言われている。測量行は、富岡八幡宮への参拝から始まったこともよく知られているところである。各地の神社仏閣に参拝した跡は、社前や門前まで測線が延びていることでも迎えることができる。京都や奈良、出雲地方など社寺名の記載が際だつて多い。その他の地方でも、西日本の測量は、態勢が増強されたこともあつて全般に西日本では社寺の記載と測線の分岐が多い。寺院の塔、神社の拝殿などが絵画的に描かれている場合もある。

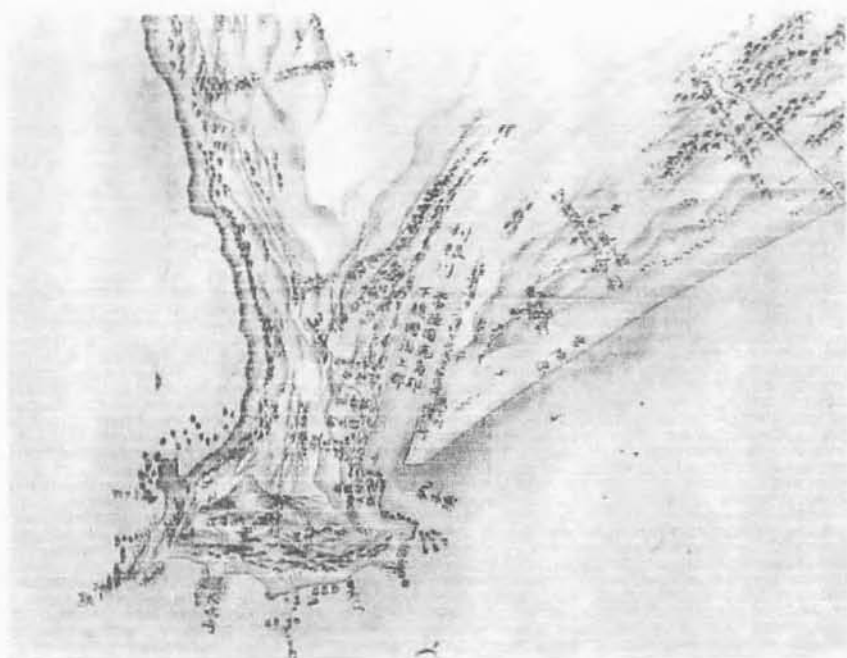
(7) 領主名・城主名

国会大図には、各村の領主の氏名が記載されている。アメリカ大図でも、第11号（浜松）など彩色図には領主名が書かれており、無彩色の図でも一部には領主名が記載されている。また、城下町には、城が描かれており、城主名が付されている場合も多い。

2. 伊能大図に見る景観表現

国会大図などの彩色図を見ると、測線や、宿駅、天測点などは別として、絵画的な表現が多い。山景や海蝕崖、砂浜の松林や寺院を囲む森など景観を絵画的に表現しているのが一つの特徴となっている。彩色図では、さまざまな表現が見られるが、アメリカ大図では、それに比べると表現は劣る。しかしそれでも子細に見ると細かく景観表現が写し取られていることが分かる。例えば、国会大図においては、第58号（銚子）に見られるような屏風ヶ浦や犬吠崎の海蝕崖のリアルな表現が見られる。一方、アメリカ大図ではこのようにリアルな表現は見られないが、海岸の表現をよく見ていくと海蝕崖や砂浜が区別されやや模式化されて描かれている。

伊能図に見られるこのような景観描写は、古地図においても共通した特徴である。現代の測量地図の立場では、表現はできるだけ客観的に実測データに基づいて地図を描画することが求められる。また、統一的な基準によって地図が描かれることも必要である。そのため、記号化が進み、描画の標準化も進む。科学技術として地図作成技術が進歩すればこのような趨勢はますます進むことも必然ではある。しかし一方で、地図の景観表現が具体から抽象へと進んで行き、景観表現に多様性が失われていくことも一面ではある。その結果、景観表現が均質化され、視覚的には弱くなっているのではないだろうか。今一度伊能図の景観表現を学ぶ必要があるのではないかと思う。



伊能大図第58号銚子・海岸の景観表現に注目 国会図書館所蔵

伊能大図の景観表現はさまざまであるが、次稿からその具体例を述べてみたい。
つづく

(ほしの よしひさ・地図協会理事長、代表理事)



伊能大図第196号島原・九十九島の島名の詳細な表記に注目

アメリカ議会図書館所蔵 国土地理院画像

佐渡「伊能大図」の写本発見

前田 幸子

伊能図探求の現場へ

佐渡に伊能図らしき地図が伝わっているが、それがはたして本物の「伊能図」であるかどうか、伊能図の専門家があつまつて鑑定する検討会が開かれるというので駆けつけた。もしこの佐渡図が本物の伊能図だとするとニュースである。はたして鑑定の結果、この地図は「伊能図」写本に間違いないと認定された。「佐渡伊能図発見！」の瞬間に立ち会い、埋もれていた地図が「伊能図」として脚光をあびて世間に紹介される様子を実見することができた。以下はその報告である。

「伊能図」鑑定団出勤す

平成十八年十一月七日 午前十時。ビジネスマンがせわしく行きかう大手町ファーストスクエアビルのロビーに、周囲とはやや異色の一団が集合した。渡辺名誉代表、星埜代表、鈴木純子理事、伊能洋・陽子夫妻、研究会HP担当 秋場武晃氏、伊能忠敬記念館学芸員 紺野浩幸氏、日本国際地図学会評議員 斉藤忠光氏。そして鑑定をうける「佐渡図」を所有する㈱ゴールデン佐渡の社長 永松武彦氏、毎日新聞社 藤由紀記者、岩下カメラマン、随行者を入れて総勢十二名。今回の検討会は永松社長が出張で同ビル内の三菱マテリアル本社に上京する機会をとらえて企画されたのである。一同「伊能図発見」への期待を胸に、エスカレーターに乗って未来都市のような吹抜けロビーから江戸時代の伊能図が待つ会議室へとタイムスリップした。

「佐渡伊能図」の発見

会議室に入りテーブルに広げられた「佐渡図」を囲んだ。すっきりとした佐渡ヶ島の形、薄緑とクリーム色の上品な彩色、海岸線に沿った細く赤い測線。渡辺代表と鈴木理事が地図を検証、渡辺「うん、間違いはない」鈴木「伊能図、ですわね」。低いが断定的に言う他の方々も異論なくうなずき、この地図が「伊能図」であると認定された。期待していた「伊能図発見」の瞬間はまことにあっさりとしたものであった。

「伊能図」であると認定されると、地図をテーブルから下ろし床に青いシートを敷いて地図を移動。カメラマンによる本格的な写真撮影となった。まず斜め方向から何枚か写し、それからやぐらのように組んだ2mほどの高さの三脚にカメラをすえて俯瞰撮影。一方、佐藤記者はスクープ記事を書くために渡辺・鈴木両氏に矢つぎ早に質問を始めた。伊能図や測量についてメモをとりながら何度も確認しつつ熱心に取材。伊能図の種類に各種あること、この地図には針穴がないことから副本に紙をかぶせて写した写本であること、伊能図に用いられる縮尺のことなど。初めての人には難しいであろうと傍で聞いていたが、後日記事になったものを見ると質問したことが実に要領よくまとめられており、また記事に添えられた写真も印象的で、さすがと感心した。

特色ある地図

写真を撮り終え一段落したころあいを見て、鈴木理事による「佐渡図」の説明がなされた。この地図は隅に安瀾堂蔵書記と朱書きがあり、写本の作者が佐渡奉行所の地方附絵図師・石江夏海であることがわかる。絵図師は絵画に優れているだけでなく測量技術も持っていたが、

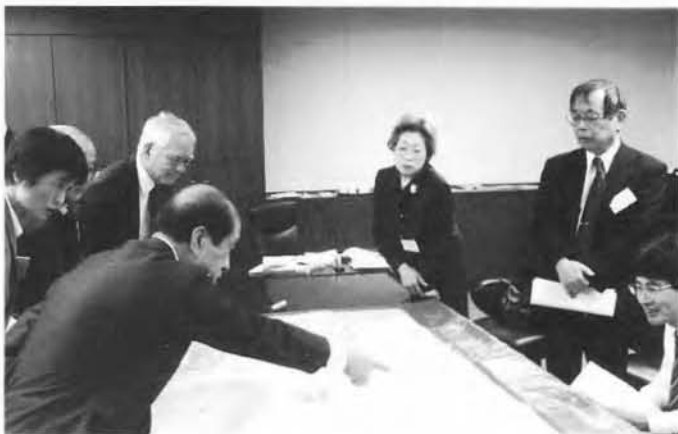


発見された佐渡大図写本

夏海は特に力量ある絵図師であった。この地図はデータのには最終版と同じであるが、文化年間の写本は珍しいもので鈴木氏も初めて見た。色彩はやや薄いが全体として美麗であり、アメリカ大図のコピー写真と見比べると、この「佐渡図」には宿駅の印や天測地の星印・港の記号がないなどの特色がある。地図全体に五寸角の経緯度線が引かれており、さらに地図余白に北極出地（緯度）の表がついているが、三万六千分の一（大図）で「北極出地」の表記があるのは他に例がなく、この地図の大きな特色となっている。

高い史料価値

この地図の重要な点は地図の由来について明確な記録が残っていることである。石井夏海の日記「御國繪圖御改正御用中日記」にこの地図の作成にあたっての経緯が記されている。「享和三年の佐渡測量の際に伊能忠敬が製作した大図を、文化十三年に地誌取調を命じられた



熱が入る検証のもよう

際に奉行・金澤漸右衛門から渡され、自分用の控えとして写した」と。

また「天保国絵図」（天保年間に幕府が全国規模で国ごとの地図を作成させた事業）の際に、夏海自身が所持する伊能図を国絵図の縮尺に拡大して利用したことが日記にみえる。この天保の国絵図に伊能図が使われたということは佐渡奉行の日記にも記載があり、当時の伊能図利用の一端を窺い知ることができる。このように「佐渡図」は作者や由来が明確であり関連文献も多いことから、史料的价值は高いと評価することができる。鈴木理事は結論した。

未公開の地図

つぎに今回地図を持参された永松社長から「佐渡図」の来歴について説明があった。永松氏は憐ゴールデン佐渡、つまりかつての佐渡金山の経営者である。佐渡金山は現在、観光施設「史跡佐渡金山」と温泉ホテルを経営しており、三菱マテリアルは親会社にあたる。余談ではあるが、最近、拉致被害者曾我ひとみさんの夫、ジェンキンス氏が勤め始めたことで話題になった。

ゴールデン佐渡がこの地図を入手した経緯は次のようなものである。そもそもこの地図が世間に出たのは、この図を描いた地方附絵師・石井夏海の家を継ぐ石井本家が昭和五十四年に地図五十四点を広島のお客様を通じて売却したことからである。売却話を聞き、資料の散逸を惜しんだ郷土史家が相川町へ購入を打診したが予算の関係でかなわず、ゴールデン佐渡が購入することになった。翌年にそれら購入した地図の展覧会を開いたが、この佐渡図は出展しなかったもので、これまであまり人目にふれたことがない。平成十七年六月、佐渡で地図展が開催された際に会場に佐渡図を持参、鈴木理事に見てもらった。これがきっかけで今回の検討会となった。ゴールデン佐渡では地図類を約二百

点所蔵しているという。

興味深い絵図たち

永松社長は今回、佐渡図の他にも十点ほどの絵図を持参されていた。いずれも石井家が所蔵していたもので、うち数点夏海が写したものが含まれている。それらの絵図もテーブルに並べられたので興味深く拝見した。



新刻日本輿地路程全国写本

シーボルトの地図は何処に？

パウアー教授会見記

前田 幸子

十一月九日、ドイツ・マールブルグ大学のエーリッヒ・パウアー教授が日本地図センターの研究會事務所に来訪。渡辺名誉代表と鈴木純子理事との間で日本の地図について情報交換を行った。

マールブルクフリーリップス大学（正式名称）はドイツ中部マールブルク市（人口七万人）にある現存する最古のプロテスタントの大学で、パウアー教授は同大学の日本研究センター長。「技術史を中心とする日本経済史の専門家であり、ヨーロッパでは指導的な日本研究者の一人と評されている。」（東京大学社会科学研究所HPより）

今回の来訪は日本地図に関する情報交換が目的である。会談は教授の流暢な日本語による自己紹介で始まった。日本研究センターは教授四名、講師三名で学部とは関係ない、いわば風俗研究所のようなところ。それぞれが研究プロジェクトをもち、自分の研究だけをしている。同大学では学生一五〇名が日本語で自然科学を学んでいる等々。

話題は伊能図に関連するシーボルトのことに移っていった。

教授「シーボルトに関する資料は主にライデン大学とシーボルトの子

孫が住むブランデンシュタイン城にあります。ブランデンシ

ュタイン城は日本からの来客が多いので資料の展示室を作りま



左から 鈴木さん パウアー教授 渡辺さん 日本地図センターにて

した。」

渡辺「私も数年前にブランデンシュタイン城を訪ねました。管理人に

城に入れてもらって展示室でいろいろ資料を見ましたが、たいしたものはありませんでしたね。」

教授 「貴重なものはあぶないので展示室ではなく後ろの部屋に所蔵しているのです。入口に夫婦の番人がいますが、最近司書を置くようになりまして。」

渡辺 「やや、貴重なものは後ろの部屋に隠してあったのか。それは残念。私はシーボルトが一晩で書き写して秘密裏に持ち帰った例の伊能図が必ずどこかに現存しているかと信じています。ブランドンシュタイン城にある可能性が高いと睨んでいるのだが。間宮林蔵が歩測した地図も見当たらないのです。」

鈴木（持参した「伊能・間宮図」写本を取り出す）「これは伊能忠敬と間宮林蔵が二人で合作したもので北海道大学の北方資料室が所蔵している小型地図です。高橋景保所蔵の『北海道図』より形がいいのです。蝦夷地の東と西を描き、針穴があります。」

渡辺 「ふむ、良い図だ。」

教授が持参した下北半島の地図のコピー（白黒）を見る。

渡辺 「誰かの編集図でしょうか。間宮図ではないですね。」

話は再びブランドンシュタイン城へ。

教授 「ブランドンシュタイン氏は資料をあまり整理していません。」

渡辺 「ボン大学日本文化研究室シーボルトコレクションには北海道の小さな地図が一つだけあります。」

教授 「シーボルト関係のコレクションがあるのはライデン大学、ボン大学、ブランドンシュタイン城、ビュルツブルグのシーボルト記念館、ポツムにあるルール大学です。ポツムにあるのは地図ではなく文献だけです。」

渡辺 「ブランドンシュタイン城にある地図は地名がカナで書いてあり

ますから、日本人の手になるものです。シーボルトが持ち出した伊能図はシーボルト自身が一晩で模写したものだからこの地図とは別のものです。」

鈴木 「その地図は特殊な紙が使われているのですね。トレースできそうな薄い紙ですか？」

教授 「いや、そんなに薄くないが、表面が光っています。」

パソコンでブランドンシュタイン氏所蔵の北海道ー下北半島図を見る。

渡辺・鈴木 「シーボルトの日本図とは違うが、参考にしたのでしょうか？」

しかし画面では詳細がよく見えないので、教授がもう一度ブランドンシュタイン城に行つて撮影し、それを札幌市在住の北方図研究の専門家、高木崇世氏（伊能研究会会員）に見てもらつて判断するということに落ち着いた。またこの図の本州のものが（つまり「つづき」の地図が）ないかどうか教授が調べて報告をくれることになった。

というところで計二時間あまり、会談は伊能図をめぐるつつ、北方図とシーボルトの地図の間を行きつ戻りつしながら、なごやかに進んだ。共通の関心をもつ専門家同士は、初対面でもすぐに心を通わせることができるらしい。傍聴者にとつても心楽しく収穫の多い取材であった。記念写真を撮つてお別れした。

近い将来、ブランドンシュタイン城でシーボルトの地図を見つけたといううれしいニュースを教授が知らせをくださることを、そして研究会で急遽「シーボルト伊能図調査隊」を編成し、ドイツに派遣する日が来ることを期待している。

（まえだ こうこ・編集委員）

芳名録より

―佐原伊能家を訪れた人々―

伊能 陽子



藤岡 紫峰 (八郎)

ふじおかしほう (一八八〇〜一九五六)

茨城県潮来出身の日本画家。第五回文展に入選。
松本楓湖、河合玉堂に師事。

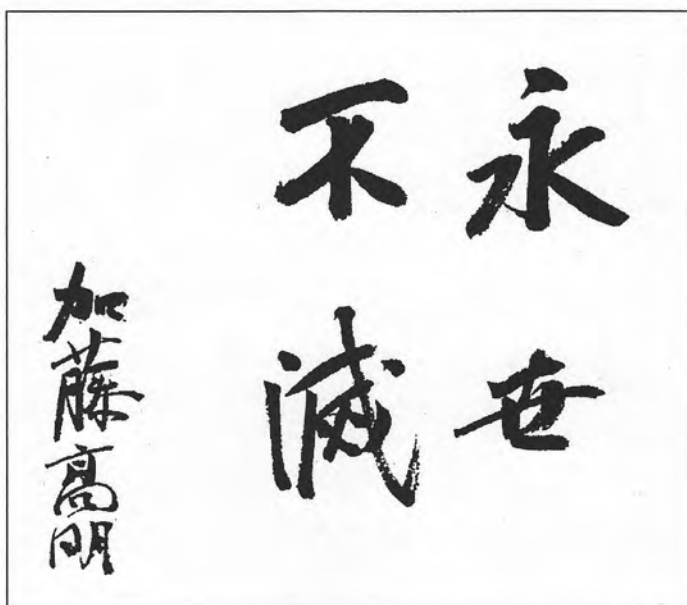
「宮本茶村」の画像は有名である。(潮来町史)

※ちなみに、忠敬の五代目にあたる伊能孝の妹ますの義弟。

亥年の春(大正二一年)ということで選んだが、
墨の色がきれいにコピー出来ず残念。



福寿草



加藤 高明

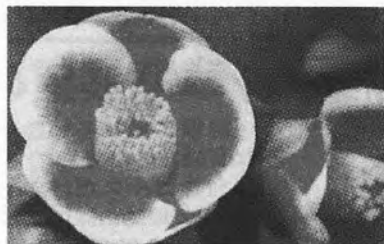
かとう たかあき (一八六〇～一九二六)

外交官政治家。名古屋藩士の子。岩崎弥太郎の女婿。
駐英公使外相をつとめ、第一次大戦中、対華二十一ヶ条
要求を提出。

憲政会総裁となり原敬と対抗。

第二次護憲運動の結果、首相。伯爵。(広辞苑)

※年月がないが、多分大正九年か十年と思われる。



玉の浦椿

富士山の方位測定

274箇所で1143回

佐久間 達夫

伊能測量隊は「道線法」によって海岸線と主な街道の距離と方位を測り、その測定値の誤差を修正するために、遠望できる山、岬、島、天守閣等を「交会法」によって方位を測定した。

「交会法」によって測定した全国の山、天守閣等の方位の記録は香取市の伊能忠敬記念館に「山島方位記」という表題で六七冊（B5版で三九二〇枚）保管されている。したがって日本の大部分の山の方位が記述されている。

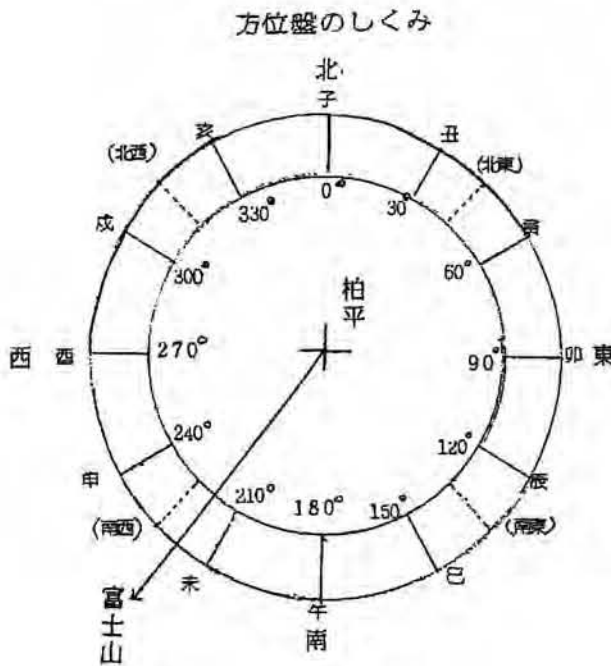
特に富士山の方位は、二七四か所で、一一四三回測定している。
（調査漏れがあるかもしれない）

一 山島方位記の見方

- ・ 観測地点 山・天守閣・岬などを測定した地点
 - ・ 観測地物 測定した山・天守閣・岬など
 - ・ 測器名 方位を測ったときの機器名。丁・戊・半円方位盤など
 - ・ 方位の読み方
方位盤は、天度三六〇度をめもり、一周を十二支にして、一支を三十度に当てる。一度有余は、曆法の六十分分に当てはまる。もし、十分割になおすときは、三にて除する。
- 方位欄の何分と記せる「分」は、一支を三十等分し、その一つを

「一分（三十分の一の意味）」と表わしたもので、一度と全く相等する。

例えば、栃木県那須町の越堀芦野間の柏平から「富士山」の方位「未六分一〇秒」（丁という方位盤を使って測定）は、未は、子（北）を基点にすると、二一〇度（三〇度×七二二一〇度）となり、六分一〇秒は、「六度一〇分」になるので、二一〇度十六度一〇分 \parallel 二一六度一〇分の方位になる。（磁的方位角を示す）



※山島方位記の方位の読み方の参照記録

○「寛政十二年測量小図」余白記載の付表

伊能測量隊が、寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日から同年十月二一日までの百八十日かけて、江戸浅草厩局より陸奥国の三厩までの奥州街道、並びに蝦夷松前から西別の蝦夷南海岸を実測して作製した「寛政十二年測量小図」の余白記載の付表に、
「自東都方位 一支為三十分」と、記述してある。

・「寛政十二年測量小図」余白記載の付表

東都以北蝦夷地北極出地度方位程測量

地名 北極出地度 自東都方位 自東都道路里数

周尺為三百六十度 一支為 一間為六尺

一度為六十分 三十分 一町為六十間

一里為三十六町

幸手	三六度七分半	凡 亥二二分	凡 一一里二一丁
間々田	三六度二〇分	凡 亥二八分	凡 一七里二八丁
宇都宮			
一池上町	三六度三六分	凡 子 五分	凡 二六里一九丁
喜連川	三六度四五分	凡 子 一分	凡 三二里二八丁
越 堀	三六度五八分	凡 子 二分	凡 四〇里二六丁
白川本町	三七度 七分	凡 子 四分	凡 四七里三五丁
須賀川	三七度一八分	凡 子 七分	凡 五四里二〇丁
二本松			
一本町	三七度三八分	凡 子 七分	凡 六三里二九丁
福島中町	三七度四七分	凡 子 一分	凡 六九里 三丁
越 河	三七度五五分	凡 子 一分	凡 七五里 一丁

舟 廻 三八度三分半 凡 子二〇分 凡 八二里二五丁

○ 量地伝習録

天保三年初冬、出雲崎の旅亭で、吉川大江忠篤が渡辺慎から借用して写したものを、天保十二年七月に京都本通二軒屋敷において、中村雅太郎が、又借りして写した「量地伝習録」に、

・磁石（羅針とも、方位盤とも、又方針とも云なり）。

小方位盤。一名杖先羅針ともいう。その形円形にして、経り四寸許。それへ天度三百六十をもち、一周十二支にして、一支三十度に当る。一度の有余は曆法の六十にて計るなり。もし十分割になおさんとするとき、三にて除くべし。

伊能東河先生流量地伝習録 門人渡辺慎・子言述

○ 『伊能忠敬』大谷亮吉編著

第二章 忠敬所用の測量法 (二) 量地法

・山島方位記 文化六年巳九月二十三日

信州和田峠印より測定

浅間山	丑 半	一九. 四〇	イ 一九. 五〇	丁 二〇. 〇〇
日光山	丑 半	二六. 〇〇	イ 二六. 二五	丁 二六. 〇〇
榛名山	丑 半	二九. 三五	イ 二九. 五〇	
赤城山	子 半	〇三. 二〇	イ 〇三. 四〇	丁 〇三. 二〇
立科山	卯 半	一七. 二五	イ 一七. 一五	丁 一七. 三〇
八ヶ岳左	丑 半	一七. 四〇	イ 一七. 三五	丁 一八. 〇〇

・文化六年測量 自武蔵前田村至江土山宿

富士山の方位 九地点 三八回

信州塩尻峠 辰二二分五〇秒(文化十一年)

・文化辛未年(文化八年)測量 自尾州黒田村至駿州庵原郡

富士山の方位 七二地点 二九一回

・文化十一年測量 自伊賀山田郡真泥村歴伊勢・美濃・飛騨

信濃・上野至武蔵

富士山の方位 三地点 六回

・文化一二年測量 山島方位記一

富士山の方位 七地点 一九回

・文化乙亥年(文化一二年)測量 山島方位記二(伊豆七島)

富士山の方位 八地点 一六回

東京都の御蔵島小白渦

・文化乙亥年(文化一二年)測量

富士山の方位 六地点 一三回

・文化丙子年(文化一三年)測量

富士山の方位 一四地点 三四回

● 観測地点 三〇二か所(重複記述二八)

実際 二七四か所

観測回数 一一四三回

三 富士山より一番遠隔地の観測地点

北東 栃木県那須町の越堀芦野間の柏平にて測る

丁方位盤 未 六分一〇秒(未六度一〇分)

西 三重県志摩市国府中ノ浜にて測る

大半円方位盤 丑二五分五〇秒(丑二五度五〇分)

大方位盤 丑二五分三〇秒(丑二五度三〇分)

小方位盤 丑二五分三〇秒(丑二五度三〇分)

甲方位盤 丑二五分五〇秒(丑二五度五〇分)

丙方位盤 丑二六分〇五秒(丑二六度〇五分)

小方位盤 丑二六分 (丑二六度)

乙方位盤 丑二六分三〇秒(丑二六度三〇分)

北 長野県の塩尻峠にて測る

小半円方位盤 辰二二分五〇秒(辰二二度五〇分)

甲方位盤 辰二三分 (辰二三度)

下方位盤 辰二二分五〇秒(辰二二度五〇分)

南 東京都の御蔵島小白渦にて測る(白髪滝に近い所)

半円方位盤 亥〇六分三〇秒(亥六度三〇分)

半円方位盤 亥〇五分五〇秒(亥五度五〇分)

丙方位盤 亥〇五分三〇秒(亥五度三〇分)

● 『第九次伊豆七島測量日記』 佐久間達夫校訂

文化十二年七月十四日 晴天 四ツ半頃より海面なぎの由申し出る。

従つて午後測量に出る。伊豆国加茂郡杉庄兵衛支配所御蔵島。居

村人家中より始め海岸へ向かい打ち下げ測量。右一町計り上、淨

土宗万蔵寺。左一町計り上、当島鎮守富賀明神社。左制札、字道

の段、居村入口木戸、字花田火立場。従是絶壁屈曲坂を下る。

此所にて富士山、藪難波島、神津島、新島三本岳、三宅島等遠測

する。(以下略) →*リナンバ島(現在の大野原島(三宅島西方))

文化十二年七月二十日 晴天 同所滞留測る。字大白渦鼻、字小白

渦測量。御蔵島一周四里二拾町四拾壱間(要約)

四 「山島方位記」に記述されている富士山の方位

※各「山島方位記」ごとに、二観測地点以外は省略

・山島方位記一 (寛政二二年・享和元年・享和二年)

観測地点 測器名 方位十分十秒 (伊能忠敬記念館蔵) 測器名 方位十分十秒 測器名 方位十分十秒

深川 申 九、三〇 九、二〇

栗橋二分過 甲 未一六、二〇

・山島方位記二 (享和二年)

深川出立前 中方位盤 申一〇、四七 乙方位盤 申一〇、一〇 小方位盤 申九、四五

丙 申一〇、一八 甲 申一〇、五〇 丁 申一〇、〇〇

深川帰府 中 申一〇、一五 乙 申一〇、〇〇 小 申一〇、三二

丙 申一〇、一五 甲 申九、四五

・山島方位記三 (山島方位記全・下書)重複

・山島方位記四 (享和三年)

箱根止宿 富士山左 中 戌三、二五 半円 戌三、二〇 小 戊三、四五 甲 戊二、五〇

駿河止宿 富士山右 半円 丑六、〇三 小 丑六、〇〇 甲 丑六、〇五 丁 丑六、〇〇

・山島方位記七 (享和三年)

中山峠 富士山中心 中 午八、二五 半円 午八、五五 小 午八、〇五 甲 午八、〇〇

深谷宿入口 小 戌二、三〇 半円 戌二、三五

・山島方位記八 (文化二年)

吉原止宿 富士山左 半円 子九、四八 小 子九、五〇 丙 子一〇、〇〇

石鏡村岡崎村界 乙 丑二七、一五 丙 丑二七、三〇

・山島方位記二七 (文化六年)

埼玉県佐間村マ印 小 未八、五五 下 未八、五〇 甲 未八、四〇

菊羅郡玉井島村

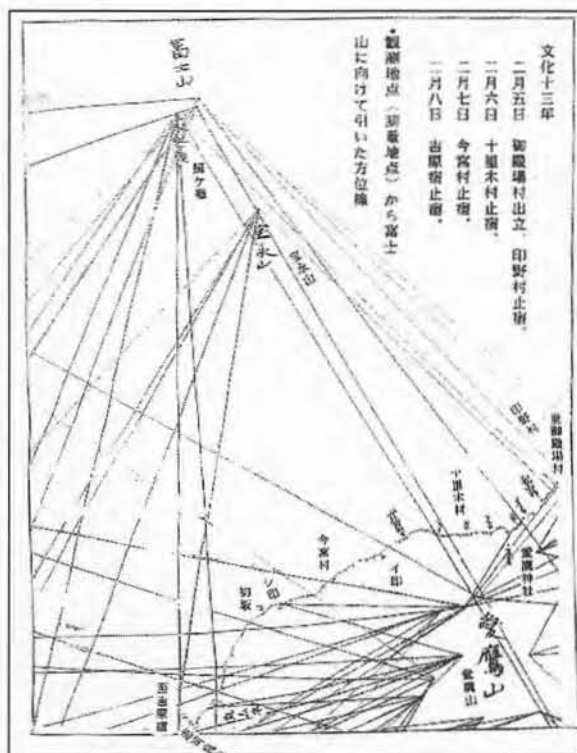
高柳村界分印 小 未一、五五 サ 未一、〇五 未一、三五

・山島方位記四二 (文化八年)

甲斐国韮崎宿二印	半円	辰二八、〇〇	同	
相模国吉野宿	小	未二四、五五	未二四、三〇	未二四、四〇
・山島方位記四三(文化八年)				
相模国金時山 富士山中央	丁	酉三、五〇	庚酉四、〇〇	
相模国須走村八印	丁	酉六、二〇	庚酉五、三〇	
富士山中央	丁	酉八、四〇		
富士山八合目				
・山島方位記六三(文化一二年)				
武藏国西ヶ原村西印	半円	申五、四五	丙申五、〇五	戊六、一〇
富士山中心	半円	申五、五〇	戊申六、一〇	丙五、五〇
滝野川村夕印				
富士山中心	半円	亥四、〇〇	丙亥四、〇〇	亥一五、〇〇
三宅島四谷村舟戸浜	半	亥四、〇〇	亥四、三五	
神津島森田沢三印				
・山島方位記六五(文化一二年)				
利島前浜マ印	丙	亥二、二五	壬亥二、一〇	
大島泉津村横腹				
・山島方位記六六(文化一二年)				
加茂郡吉田村伝馬場テ印	丙	丑一四、五〇	壬丑一五、五五	
加茂郡八幡村追分				
・山島方位記六七(文化一三年)				
富士郡大宮村ワ印	丙	戌三三、一五	戊三三、一〇	
富士山中左寄	半円	亥二、四〇	亥一、三〇	
富士郡猪頭村サ印	半円	丑五、四五	丙丑五、一〇	壬子二六、〇〇

● 第九次富士山麓付近測量下絵図

伊能忠敬記念館蔵



このように伊能忠敬は、正確な地図を作成するには、遠望できる山々、特に富士山の方位が必要であったのである。
 なお、山の高さは、唯一富士山だけが記述されている。それによると、西倉沢村（現静岡県）での測定値が三七三二・三五四mで、現在の測定値（三七七六m）と、僅か四四mの違いである。

富士山の高さは次の場所からも測定している。

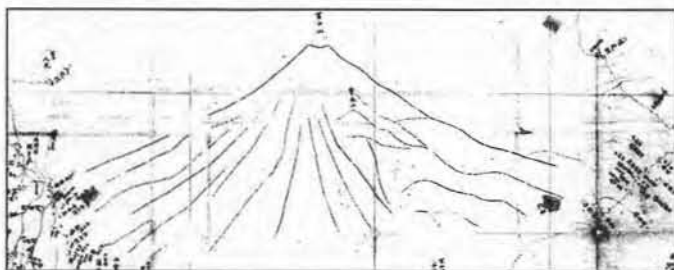
観測地点	方位	直高	高さ
箱根宿	方一分半	二十八町二十四間	三〇九七、八七二m
三島宿	方九分半	二十三町五十二間	二六〇三、三七六m
吉原宿		三十三町三十三間	三六五九、六三四m
沼津宿	亥三分		(一尺は三〇、三cmとして換算する)
原宿	亥五分半		

昭和二十年の戦争終結まで「小学唱歌」(現在の音楽に類似した教科)に掲載され、愛唱されていた歌に「ふじの山」という曲があった。

ふじの山
 あたまを雲の上に出し
 四方の山を見おろして
 かみなりさまを下にきく
 ふじは日本一の山

伊能忠敬も、富士山の美しさと雄姿を見て、元気を貰い測量の旅を続けたのであろう。

(さくまたつお・伊能忠敬研究家)



伊能大図総覧刊行に！

■コラム「青鉛筆」

朝日新聞 06年12月27日

地名探求の「苦労」！

「一つだけ、『正月不知』という地名が読めずに残りました」。伊能忠敬の地図を集めた新刊の「伊能大図総覧」で、地名解説を担当した元国土地理院長の星埜由尚さんは振り返る。214枚の地図を載せた本には地名がざっと3万9千件。虫眼鏡を使って書き写し、資料を探し、役場に問い合わせるなど八方手を尽くした末に、あしかけ2年で地名索引を作った。

地図センターの出版物等のご案内

■「伊能大図総覧」 上・下巻+解説書 定価 399,000円(税込) <分売不可>



【明細】
B2変形判(525×396mm)
本文地図 B2変形判(525×740mm)
二つ折り 片断4色刷
表紙外寸 535×405mm
地図枚数 上巻=117枚
下巻=120枚
解説書 B4判、256ページ
表紙 クロス装
(上巻=黒筒色、下巻=紺色)

「正月不知」は山口県下関市(旧豊浦町)にあった字名らしい。『ど』うもあまりいい意味でないような気がして……。年の瀬だけに気がなります」

■河出書房新社で完成披露 1月10日

■コラム 東京新聞 07年1年11日 総覧発売に！

☆…江戸時代の測量家、伊能忠敬がつくった全国地図のうち、最も詳細な縮尺三万六千分の一、二百十四枚の「大図」全部を収録した「伊能大図総覧」(河出書房新社、上下セット三十九万九千円)が、十一日までに限定三百部をほぼ完売する見通しになった。

☆…総覧は昨年十二月二十日に発売。同社の担当者は「購入者の六割

は会社経営者や医師などの個人。今後は予約のキャンセル待ちになるだろう」と話す。

☆…伊能大図の原図は火災などで失われたが伊能図研究家の渡辺一郎さんが二〇〇一年に米国議会図書館で二百七枚の写しを発見。その後、各地で写しが見つかり原寸の約三分の一に縮小したB2判サイズで出版が進められていた。

猪突猛進！猪年の地名

齋藤 仁



能登半島に吹いた伊能忠敬の風

河崎 倫代

今からちょうど二百年前の一八〇七（文化四）年三月、伊能忠敬はどこで何をしていたのでしょうか？ 一八〇五、〇六年の二年がかりの紀伊半島・山陽・山陰測量を終えたばかり。江戸深川黒江町の自宅を地図御用所にあてて地図作成の毎日だったようです。十二月には完成した地図を幕府に上呈しています。今年は、地方からの「伊能測量二百年」関連のニュースが届かない、ちよつと寂しい年です。

こちら石川県では、昨年、能登半島に伊能忠敬の風が吹きました。能登で風といえば「あいの風」。海から陸へ吹く北東の風で、昔から豊漁や豊作、幸福をもたらすとされてきました。『万葉集』の編者大伴家持も、越中伏木（高岡市）の国司時代に、この風を詠んでいます。

あいのかせ
東風 いたく吹くらし 奈呉の海人の 釣する小舟 漕ぎ隠くる見ゆ

奈呉の浦は、富山県射水市にあった放生津潟付近の海岸です。一八〇三年に、伊能忠敬が地元の測量家石黒信由と出会ったのもここです。

一、主人公は平山郡蔵！

能美龍一郎「群青の人」が日本海文学大賞北陸賞受賞

昨年十一月、家人から手渡された一冊の本『第十七回日本海文学大賞―入賞作品集―』。そこに収録された、小説部門北陸賞受賞作品「群青の人」は、次のように始まっています。

陽炎が砂浜に立ち、松林や苦屋、小舟がその姿をゆらゆら揺らしている。灼けた砂を踏むので、足裏がひりひりとする。（略）

つい先ほど、苦屋の影で中食をすませ、伊能勘解由の測量隊と別れたばかりである。伊能勘解由ら五人は今浜より右に折れて所口に向かい、それより内浜を測量することになっている。平山郡蔵は津村大兄、久兵衛と三人で、外浜回りで能州を歩くことになった。

「ん、これは？」「まさか、能登測量が小説に？」「平山郡蔵が主人公？」と、「？」の連続。その時、頭の中をよぎったのは、井上ひさし著『四千万歩の男』です。これまで、伊能忠敬を小説にしたのは、後にも先にもこれだけではなかったでしょうか。とすれば、「歴史小説史上二番目の快挙？」、「でも、どうして？」「なぜ、郡蔵？」と、疑問符が頭の中でぐるぐる状態のまま、ただ字面を追っていました。

そこでは、『四千万歩の男』のような奇想天外な事件が次々と・・・という展開はなく、平成の世にもありそうな、家族や上司、同僚に対して抱く一人の人間の心理がみごとに描写されていました。群青の日本海のように、人間の心も大波小波に揺れ動いているようでした。

そのうちに、作者の能美龍一郎氏にお会いしたいという気持ちが強くなってきました。これは会誌で紹介する必要があるのでは、という思いもしてきました。何といっても、井上ひさし氏以来の久々の「忠敬物」です。会員の皆さんにもお知らせしなければ。新聞社から連絡を入れていただいた後で、直接電話をしました。とつても意外で、かつ嬉しかったのは、「じゃ、明日はいかがですか？」と言われたことでした。スピード感あふれる展開となり、本当に、電話の翌日お会いしました。そして、会誌に寄稿していただけることになりました。前置きはさておき、何はともあれ、お読みください。

〈特別寄稿〉 「群青の人」の周辺 能美 龍一郎

江戸という時代が生んだ巨人、伊能勘解由忠敬の弟子のひとりに平山郡蔵がいる。郡蔵は男鹿半島に続いて、ここ能州で測量の腕が試されることとなる。それも、二十日間に亘る長期間の測量である。初めての体験であり、さぞかし、肩に力が入ったことと思われる。

その郡蔵が見たこと、行動したこと、考えたことを、わたしはとにかく推理しながら書いてみた。平山家の跡取り息子として、平山の名をあげるように親から期待されながら、やがて師から破門される郡蔵。能州での測量時に、すでにその兆候みたいなものがあつたのだろうか。人は、敬う人から離れてひとりになった時に自分が出てくるものである。

伊能勘解由忠敬は自分の大仕事を急ぎ遂行させるために、郡蔵には気を遣ったはずである。外浜の激しい海岸線を測量するように命じられた時、若い郡蔵は感激したことだろう。責を任され、測量の信を得たのである。ただ、ここには師と弟子の、互いに位相の違う目論見のようなものがあつたと思われる。利用する者と利用される者との意識の差のようなものである。

能州内浜へと向かう師伊能勘解由忠敬と、今浜の地で別れた郡蔵。郡蔵が訪ね歩く外浜は、断崖絶壁、岩肌の海岸、砂浜とあらゆる要素をそなえている。確かに、学んだことを復習し、実行するには絶好の場ともいえる。

彼、郡蔵の足跡を追いかけて、その日記の行間から、測量した一日の様子を推理し、フィクションを組み立てて行く。フィクションは時として、事実以上に事実的であると思う。つまり、フィクションを加えることから、郡蔵という男が見えてくるのではないかということであ

る。日本全図は伊能個人の成果だけではないはずである。伊能というチームの結果であり、平山郡蔵という優れた弟子がいてこそできた大仕事であつたはずである。わたしは伊能という巨人の影に隠れている郡蔵に興味を持った。すると、郡蔵がわたしに近づいて来た。そして、顔を見せてくれた。

能州は、わたしの父の郷里でもあり、郡蔵が歩いた道はわたしもよく歩いた道でもある。同じ風景を、同じ夏の暑い時刻を、わたしは五十年後に歩いた。夏休みに入り、旧盆が来ると、蝉しぐれと波音を耳にしながら、門前付近の浜をよく歩いたものである。わたしは、結局、郡蔵を通して、わたしの能州を描いたような気もする。

「群青の人」に出てくる、断崖から海に飛び込み、群青の海を泳ぐ鹿の目には何が写ったことだろうか。また、海で亡くなった者を流れ仏として敬う能州の地、その群青の海の果てには何が見えるのだろうか。郡蔵の目は、わたしの目であるかもしれない。

子を慕う平山家、師を慕う郡蔵。郡蔵をとりまく仲間たち。日本全図の完成を願う勘解由忠敬。各自の思いが、歴史をつくっていく。歴史とは、そんな各自の小さな思いが重なりあつてつくられる風景であるような気がする。

とりわけ、勘解由忠敬は隠居した後自分のやりたいことを見つけ、その道に進んだ男である。おそらく、津々浦々の行く先々で、これから隠居しようとする男たちに、なにか「生きる暗示」を与えたこととも思われる。これも、彼の大きな功績であることを忘れてはなるまい。

村の底がまだ暁暗のうちに眠っている時刻、雄鶏がけたたましく鳴く能登。やがて、白いひと筋の煙が葺葺き屋根から登る。あては木の葉を燃やすとパチパチと音を立てることから、嫁起こしとも呼ばれて

いる。別名あすなるの木である。今でも、能登の田舎では朝を迎える
と雄鶏が鳴き、あての葉をばちばちと燃やしている。郡蔵の時代と少
しも変わらない風景がある。囲炉裏の煤の匂いを思い出しながら、わ
たしは享和三年の夏に飛んでいた。

拙著「群青の人」のあらすじを紹介しよう。

享和三年の夏、伊能忠敬の測量隊は加州・大聖寺に入り、小松から
金沢へ。そして、能州へとまわった。加州前田家中は、あまりいい顔
をして見せない。伊能測量隊を、国を調べに来た公儀の隠密であると
断じている。伊能忠敬を身分の卑しい者としている。まだ、科学とい
うものを、あるいは海の向うの国を意識することはなかったのだろう
か。藩内の科学を学ぶ者には伊能に会うことさえ禁じている。

今浜の地から、平山郡蔵は外浜の測量を任せられ、忠敬は所口から内
浜へと歩いた。郡蔵はおれの測量技の腕を揮うには、いい機会であ
るとした。とりわけ、年下のライバル慶助には負けたくなかった。

・ ・ ・ 勘解由様は、慶助を手もとに置きたかったのだ。そしてその
ことで、わしは慶助に嫉妬しているのだろうか。それで、わしはむき
になって険しい断崖を下り、その足もとを量ろうとしているのか。

平山郡蔵は忠敬から、「体に気を付け、くれぐれも村役人と諍い、も
めごとなど起こさず、量るを大事とするべし」と言われる。外浜は岩場
が多く、難所が続く。舟に乗り、海上から陸地を量る時もあった。一
日、二里二丁しか量れない日もあった。

そして、鹿磯の浜で、海を泳ぐ鹿の捕獲をめぐる漁師の喧嘩に巻き
込まれ、坂の傾きを量る小象限儀が壊されてしまう。ところが、その
場にいた腕のいい舟大工の八次がなんとか修理をしてくれて、困り果
てた郡蔵を救う。八次の弟はつい先頃、海にのみ込まれて亡くなって

いる。能州では、海で亡くなった者は流れ仏になって、在所に恵みを
もたらすといわれていた。

雨に打たれ、大風に悩みながら、梵天と本羅針、半円方位盤を頼り
とする郡蔵。鹿が泳ぎ、流れ仏が漂う群青の海に、郡蔵が見た思いは
何だったのだろうか。

二十日の間を置いて、郡蔵と師・伊能忠敬は松波で再会する。鹿磯
での小象限儀の事故は、郡蔵の日記には記されていない。 (了)



「群青の人」掲載本と北陸中日新聞 2006年10月31日

能美龍一郎氏は本名早瀬徹。一九四八年、石川県に生まれ、現在は石川県能美市にお住まいです。お仕事はコピーライターで、早瀬広告事務所代表です。氏は昨年、能美龍一郎のペンネームで書いた「群青の人」で第十七回日本海文学大賞北陸賞を、剣町柳一郎の名前で発表された「かざりや清次」で第三十四回泉鏡花記念金沢市民文学賞を受賞されました。今、注目の時代小説作家で、今年一月からは北陸中日新聞夕刊のコラム欄「紙つぶて」を担当するなど、多忙な日々を送っています。そんな中で原稿をお寄せいただき、感謝申し上げます。

『かざりや清次』は副題「金沢城下細工人譚」が示すように、幕末から明治にかけての金沢を舞台に、象嵌、毛針、金箔などの細工物職人の心意気や挫折、家族愛などが人間味豊かにつづられています。参考までに、表題になっている象嵌師かざりや清次のモデルは、金沢が生んだ文豪泉鏡花の父親だそうです。『かざりや清次』は昨年末、蒼文舎から出版されました。なお、直接、著者への注文も可能です。

〒921-1815 金沢市高尾二丁目一ー一 早瀬徹宛

電話 〇七六・二九六・二三〇〇 送料込み一三六〇円

平山郡蔵の能登測量を描いた「群青の人」をお読みにになりたい方は、次の二通りの方法がありますので、どうぞ。

①『第十七回日本海文学大賞入賞作品集』を、中日新聞北陸本社編集局庶務課へ直接申し込んでください。

電話 〇七六・二三三・四六一六

代金 七百元 (別途送料 二百円)

②北陸中日新聞のホームページ「日本海文学大賞」のページで読むことができます。アドレスは次の通りです。

<http://www.hokuriku.chunichi.co.jp/nihonka/>

お話の中で印象的だったのは、「北陸にいて江戸のことは書けませぬしね・・・」と何度か口にされたことでした。その言葉通り、身近な能登の自然や人情を、金沢の四季の移ろいや路地裏の情景を細やかに描いていて、それが作品にリアリティと奥行きをもたらしているように思われました。

生来の好奇心と、コピーライターという仕事を通じて得た人間関係や様々な情報、それらの蓄積が作品を生み出す源となっているのと。例えば、「群青の人」に登場する黒嶋村の廻船問屋森岡屋又四郎について、以前、仕事上のことで子孫の方にお会いしたことがおありとか。実は私も、加賀藩測量での宿泊地を訪ねて、十年ほど前に黒嶋(現在は輪島市)を訪れたのですが、子孫はすでに県外に住まいし、墓参にしか帰らないということでした。そのことを思い出し、早瀬氏が少しばかり羨ましくなりました。

もう一つ心に残ったのは、「伊能忠敬は平山郡蔵にとつてはデーモンだった」と言われたことです。『測量日記』を読む限り、忠敬も弟子たちも、地元との軋轢はあっても、懸命かつ淡々と日々の測量作業を遂行していたように思いがちです。しかし、一人の人間として、同僚や師弟間でのトラブルや悩みがなかったとはいえないと、気づかされた。歴史小説は、残された史料の行間にドラマを描くことができる人だけが創り出せるものですね。

石川県内に三十六泊もした(ちなみに、お隣り富山県は六泊で通過)伊能忠敬については、いつか「隠居」という観点から描いてみたいとのこと。前掲の寄稿文でも、

勘解由忠敬は隠居した後に自分のやりたいことを見つけ、その道に邁進した男である。おそらく、津々浦々の行く先々で、これから「隠居しようとする男たちに、なにか「生きる暗示」を与えた」

とも思われる。

と書いています。次の作品の中で、伊能忠敬は加賀藩の誰にどんな「生きる暗示」を与えてくれるのでしょうか。楽しみです。昨年三月に退職し「隠居」の身となった私には、忠敬を主人公とした早瀬氏の「隠居物」が待ち遠しく思われます。今後ますますの活躍をお祈りします。

二、能登半島最先端、珠洲市狼煙町に

「伊能忠敬と灯台と民具の能登さいはて資料館」オープン

前号でも紹介していただきましたが、昨年十月二十一日、生まれ故郷の能登半島最先端、珠洲市狼煙町に「伊能忠敬と灯台と民具の能登さいはて資料館」をオープンしました。 ← 珠洲市観光協会HPから



会員の皆さんの中で、一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけて、能登半島を一周された方はいませんか。「能登の親不知」といわれていた輪島市皆々木と珠洲市真浦の間にトンネルが開通し、車での半島一周が可能になると、空前の奥能登ブームが到来しました。

ゴールデンウィークや夏休みには大勢の旅行客が押し寄せ、何キロもの渋滞をひき起こすこともありました。そんな中で、地元有志が観光事業組合を結成し、土産店・レストラン・民具資料館などを経営。

しかし、いつしかブームは去り、一九九七（平成九）年に組合は解散、資料館も閉鎖しました。そして十年後、この民具資料館だけを再オープンさせたのです。

館名の由来は、能登半島さいはての地にあつて、日本のさいはてを踏破した伊能測量隊と、さいはての地で日本の海を守ってきた灯台をテーマにした資料館にしたいという思いの中になりました。

築後三十三年の古くて小さな建物です。まったくの私設資料館のため、看板は手作り、冷暖房不完備がウリのケチケチ精神で運営しています。もともと、十年間閉鎖されていた民具や建物が「もったいない」、少子高齢化で寂しくなったふるさとに何かお返しできないか、という発想からスタートしました。金沢と行ったり来たり生活ですが、ここを拠点に、自分なりの「隠居」通信を発信していきたいと思っています。

では、館内を案内しましょう。

伊能測量関係では、加賀藩測量の行程図と日記を紹介したパネルを吊り下げ、イギリス・グリニッジ海事博物館「文政四年小図」（複製）と呉市入船山記念館「浦島測量之図」「御手洗測量之図」（複製）を展示。「伊能忠敬研究」のバックナンバー、映画・舞台（どちらも、加藤



手作り看板の資料館

剛が主役)のパンフレット、「伊能ウォーク・金沢」の写真やグッズ類、書籍などは展示ケースに。これらの資料は自由に見ていただいています。必ずしようと思いましたが、一つだけあります。それは、来館者の出身地をお聞きし、『東京国立博物館所蔵 伊能図』(武揚堂)の該当ページを見ていただくことです。

私自身の伊能忠敬との出会いが、たまたま見た伊能図の中に故郷とその近辺の地名が正確に記載されていたことへの感動にあつたからです。自分が熟知している地域を見てこそ伊能図の真価が実感できるし、それは小学生以上だったら誰もができる感動体験だと思います。その信念のもと、館主のおせっかいは続きます。来館者の皆さん、覚悟の上で入館してくださいませ。

灯台関係では、明治十六年初点灯、今や重要文化財級の禄剛埼灯台の紹介。灯台守だった曾祖父の残した辞令等の書類や制帽、赴任地灯



「伊能忠敬研究」も並ぶ



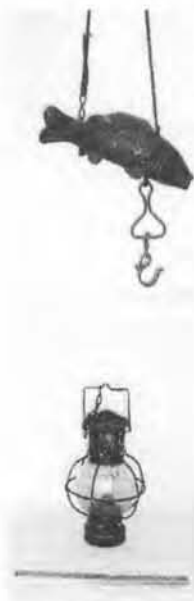
加賀藩測量パネル

台(島根県の美保関灯台、福岡県の孤島にある鳥帽子島灯台、古志岐島灯台など)の写真などを展示。今後は、狼煙出身灯台守の足跡をたどり、灯台とともに生きてきた町の歴史を掘り起こしたいと思っています。



能登半島最北端 禄剛埼灯台

民具関係では、十年間ほこりを被っていた民具・農具はおよそ二百六十点あり、名称・用途を記したカードを付けて展示。珠洲市内には、同様の資料館はないので、地域の歴史、先祖の生活を知る貴重な資料として、市内の小中学生に見学してもらえようような活動と働きかけをしていきたいと思っています。



自在鉤とランプ



オープン記念コンサート“蔵画廊てらい”にて

場所 珠洲市狼煙町 狼煙駐車場横(バス停から徒歩二分)
 開館 四月〜十一月の土・日曜日 (十二月〜三月休館)
 午前九時半〜午後四時半
 電話 開館日 ○七六八・八六・二二三九
 休館日 ○七六・二六八・五七二五

正直な気持ち、「資料館」と胸を張って言えるような建物でも資料でもありませんが、ともかく見切り発車しました。会員の皆さまには、今後とも温かく見守り、厳しく導いて下さいますようお願いいたします。

三、「伊能ウオーク番外編・能登半島270キロウオーク」

昨年五月三十一日、全国から集まったウオーキング愛好家九十六人が、能登半島一周に向けて七尾市を出発しました。「伊能ウオーク」では歩けなかった能登半島先端部270キロを、十日間をかけて一周しようという計画です。日本ウオーキング協会の大内惣之丞副会長をはじめとして、最高齢八十二歳の大阪府高槻市の男性までいずれも健脚ぞろいの皆さん。十日後の六月九日、目的地の羽咋市に無事到着され、「軍艦島(見附島)や窓岩など、能登の景色は素晴らしかった」と、笑顔でお互いの健脚をたたえ合ったとのこと。

たまたま資料館整理のため珠洲市に帰っていた私は、狼煙町駐車場に続々と集合する皆さんにお会いすることができました。祿剛埼灯台の台地までお供したのですが、その早いこと早いこと。今年の大河ドラマではありませんが、「疾きこと風の如し」。皆さんあつという間に、岬自然遊歩道の向こうに消えてしまいました。

四、平山郡蔵隊エピソード

能登測量の支隊を任された平山郡蔵は、師の期待にこたえようと測量作業に全力投球。さらに、師に習って地元情報を丹念に収集しました。それは、忠敬によって清書され、『測量日記』に収録されています。加賀藩の警戒心を知ってからの、忠敬自身の『測量日記』が簡略になったのとは大きな違いがあります。

現在の輪島市と珠洲市の間をはばんでいた「能登の親不知」を、平

山隊は七月十六日に測量しました。このときの日記には

ここから大難所。ヒロギという。手を広げて通ることからついた。山道は蓑マクリといって、風雨の時は往来するのに蓑を着用できないという。この難所と塩浜との堺に滝があり、それより逆（さかさ）ま川という。ここまでが鳳至郡で、ここからが珠洲郡真浦村である。

と記されています。ここは、標高三百五十七メートルの岩倉山が断崖となつて海に落ちこんでいるため、人々は断崖の岩肌にしがみつくようにして進むのですが、海中に落下し波にのまれて命を落とす者が絶えなかつたそうです。

これに心を痛めた珠洲市片岩町海蔵寺の和尚まがらみ麒麟は、この岩壁に通路を切り開こうと思ひ立ち、托鉢や寄付で集めた浄財で石工を雇つて、十三年間の難工事の末に、ようやく岩場に「ヒロギ越え」と呼ばれる細路を開きました。一七九二（寛政四）年のことです。郡蔵たちがここを何とか測量できたのは、十年前にこのヒロギ越えが開かれていたからだったのです。

一八八七（明治二〇）年に歩道トンネルが開鑿され、さらに一九六三（昭和三八）年には二本のトンネルが開通し、奥能登最大の難所がわずか一、二分で通過できるようになりました。前述したように、車による半島一周が可能になり、空前の奥能登ブームが到来したのです。

現在、曾々木トンネル入口近くに麒麟和尚の石像がありますが、これは江戸末期に地元民が建てたものです。郡蔵たちが測量に訪れた一八〇三年、和尚は七十六歳でまだ健在でした（一八二二年没）。郡蔵たちの海岸測量を、きつとどこかで見ていたに違いありません。和尚のことですから、もしかしたら、群青の海を前にして、郡蔵と少しばかり立ち話などしたかもしれませんね。

今も、二百年前とあまり変わらないように見える日本海ですが、実は十年前の一八九七（平成九）年一月、この海岸一体が真っ黒な重油に覆われたのです。島根県隠岐島沖でロシア船籍タンカーナホトカ号の船体が破断。福井県三国沖に漂流、座礁した船首から流出した重油が、大きな塊となつて日本海側九府県、石川県内十八市町に押し寄せ、美しい海岸が無惨な姿へと変貌しました。雪の降りしきる厳冬の岩場での回収作業に、地元住民はもちろん市内外からのボランティアや自衛隊員など数万人が参加しました。四カ月後ようやく元のきれいな海を取り戻すことができたのです。

しかし、今また新たな問題が起きています。古来、さまざまな文化や歴史を運んできた対馬海流ですが、近年は中国や朝鮮半島から大量の漂着ゴミをもたらし、能登半島の沿岸一帯を汚染しているのです。「能登さいはて資料館」にも、ハングル文字や中国語、日本語の散乱するペットボトルなどの漂着ゴミを展示してあります。

二百年前に伊能忠敬測量隊が歩いた能登半島最先端珠洲市狼煙町へ、是非一度お越しください。祿剛埼灯台の建つ台地からは、二七〇度の大パノラマで日本海が広がっています。

（かわさき みちよ・元金沢学院大学付属金沢東高校、石川支部長）

事務局：河崎さんには昨年11月16日全建とやま（富山県建設技術

協会）で講演をお願いしました。協会設立60周年記念行事で「富山県と伊能忠敬との関わり」を語り好評でした。

わんからしんの実測体験 in 三条 山浦 佐智代

「七メーターだ」

「イヤ、七メーター過ぎただけだね」

「俺は、八メーター過ぎただけだね」

歩測ゲーム会場は、こんな会話が飛び交った。子供の部と大人の部にわかれて、秘密にされている道のりを、各自歩測により距離を割り出し、正確さを競っているのだ。

大人の部では上位三名、子供の部では上位十名が表彰されて賞品を受け取った。プレゼンターは我が新潟支部、支部長の小林二三さん。大会挨拶もつとめられた。

これは平成十八年十一月四日、三条市西大崎地内の五十嵐川河川敷において開かれたイベントのヒトコマである。

この場所は、平成十六年「七・一三水害」^注を引き起こした堤防決壊現場の少し上流にあたる。

イベントの題名は

『わんからしん(コンパス)測量の実測体験』サブタイトルが

『：伊能忠敬に挑戦しよう！』

発起人は、新潟支部の山岸俊男さんである。山岸さんの話に賛同し采配をふるった方が、三条地域振興局地域整備部長の真田弘信さん。←



小林支部長の開会挨拶。
その左が「わんからしん」を保存していた三条市の稲越さん。



これが主役の「わんからしん」＝彎窠羅鍼
方位測定器具。小方位盤または杖先羅針などともいう。杖の先につり下げられた羅針儀で方位を測るが、傾斜地に立てたり、杖そのものが傾いても水平が保てる構造になっている。磁針の周りに三六〇度の目盛りと十二支を示す目盛りが刻まれている。

編集部への話題は11月6日「新潟県央ドットコム」、9日「新潟日報」で写真入りで報道されました。

真田さんの尽力で多勢のスタッフが集まった。

- ・ 燕三条青年会議所 まちの魅力委員会
- ・ 新潟県建設業協会三条支部

クリエートクラブ

- ・ 新潟県測量設計業協会 三条支部

- ・ 新潟県土地家屋調査士会 三条支部

それに、真田部長が所属する、

- ・ 三条地域振興局地域整備部

五十嵐川改修事務所

そして、わが伊能忠敬研究会・新潟支部を含めて六団体、総勢二十名を超えるスタッフとなった。

ところで、このイベントが、なぜ三条市で開かれたのか、少し経緯を紹介しておきたい。

平成十六年十一月、新潟県立自然科学館では、『伊能忠敬の地図展』が開かれていた。

その会場に、江戸時代の測量機器である「わんからしん」を、持参して現れた人物がいる。

三条市在住の稲越克也さんである。おりしも、そこに研究会名誉代表の渡辺一郎さんが来場されていたので、稲越さんは、渡辺さんから、その機器の由来などを、教えてもらうことができた。

しばらくして今度は、新潟支部の垣見壮一さんと、山岸さんが稲越宅を訪れた。私は、三条市在住なので道案内として、お供させていた。

わんからしん談義に花が咲いている時、山岸さんは、時代物の輝きに惹かれたのか「これー

いた。」



「さあ！ぼくも歩測にしゅっぱーつ！」
「まじまじするとわからんちん」



「何か見える？」「熊が寝てるよ」「大きくなったら何になる？」「大きくなったら測量士だあい」



を使って測量をしてみたい」と、稲越さんに話を持ちかけた。その場で快諾を得た山岸さんは、三条地域振興局の真田さんに話をし、今回のイベントにつながったというわけだ。

当日は、十一月とは思えないほど暖かで、おだやかな日となった。歩測ゲームのほかに、わんからしんと同じ原理のコンパスを使用して、区切られた場所の面積を計測し、野帳に付けて作図するという体験会もあった。

ここでは、測量士のスタッフ達が懇切丁寧に指導してくれるので、全くの素人の大人でも、子供達に混じって作図を完成することができた。また、対岸にセッティングした動物の絵を、最新の測量機器・トランシットを使って見つけるなど、現代と江戸時代の両方の測量方法を学ぶことができた。

そのほか会場では、クリエートクラブの女性部員達が、豚汁をふるまってくれたので、身も心もいっぱいになることができた。

なお、新潟支部の生みの親とも言える石川進さんが、駆けつけるなど、参加者は、ほぼ百名に達した。

このイベントに際して、スタッフの面々は、会場の草刈、テント設営、測量器材準備、当日の簡易トイレの手配、河川敷に作られた臨時駐車場での車両誘導、参加者受付、あらゆるメディアに対する広報、説明用の看板や、案内板作りと、いろいろな準備や作業を、地道にこなし



北極に南極、実測方法を指導する山岸さん

ていった。その姿は、大変なものもしかった。

ところで、少し付け加えたいことがある。歩測ゲームに使用した『歩測れんしゅうシート』は『オフィス地図豆店主』である山岡光治さんのホームページから許可を得て拝借した。また、山岡さんからは『伊能忠敬豆辞典』と『間宮林



五十嵐河川敷は伊能図の即席展示場に。展示の伊能図は新潟支部の垣見さんから提供していただく。

蔵豆辞典』をたくさん提供していただいたので、これを参加者の賞品に充てることができた。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。山岡さんのホームページ『おもしろ地図と測量のページ』は、以下なので、是非ご覧いただきたい。

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer>

また当日、稲越さんは、わんからしんを固定する棒を、見事に作りあげて、参加してくださいました。ご職業が大工さんなので、こういう仕事は、お手の物のようだった。

閉会後の反省会では、いいお話をたくさん聞くことができた。某氏曰く、

『こういうイベントを持つことが、…一緒に何かするということが、異業種の人たちの心と心を、結んでくれる。…それで、仕事もしやすくなるし、この仕事は、何処に頼めばいいとか、わかってくるし、…そうすれば、災害に遭ったときなど、お互いにすぐに行動ができるようになるしね。…』

イベントというのは、成功させることが目的に思えるが、そこに至るまでの、行動や声掛けにも、大切な意味が含まれていることに、私自身気が付かせていただいた。

最後に、山岸さんの言葉を添える。

「子供には、紙の上の勉強だけではなく、このような体験をしてもらうことが、とても大事なのです。…」

三条市では、お陰様で、水害後の復旧工事が着々と進められている。また今回のイベントを見ても、ここまで乗り越えてきたというエネルギーをも感じた。三条市が災害から立ち直る日も遠くない。

(やまうらさちよ・主婦、三条市)

編集部注：山浦さんは三条水害で床上浸水の被害に遭われ、一昼夜たつて救出されました。



「それなー!?」興味深々、子供の宝は好奇心。中央、帽子の方は真田さん



イベントを推進。にやかにスタッフの皆さん



映画「掘るまいか・手掘り中山隧道の記録」監督 橋本信一
豪雪の山村・新潟県山古志村。つるはし一つでトンネル掘りに立ち向かった村人たちの16年におよぶ精神とエネルギーの記録。この映画は1900名を越す全国各地の有志から寄せられた資金により、住民総出の支援のもとに制作されました。日本の地域共同体には助けられる共同作業の伝統が確固としてあった証明です。わが会員の山岸俊男さんはプロデュースメンバーのひとりです。自らも出演されています。

九州支部だより

伊能図探訪 太鼓谷稲成神社蔵『日本地理測量之図』

石川 清一

九州支部発足時から毎年の行事として九州周辺の伊能図にゆかりの地を訪ねる旅を行っています。今年度は10月14・15日島根県津和野町にある太鼓谷稲成神社に伊能図探訪の旅を行った（稲荷と書かず稲成と書く唯一の神社とのこと）。今年の参加者は6名。JR博多駅から新幹線には遠路佐世保から平川定美氏、福岡から野田茂生氏と小生、途中小倉から中富道利氏が乗車。新山口駅で乗換、目的地津和野の太鼓谷神社で福岡からマイカーで参加の井上辰男夫妻が合流し、これで行く全員が勢揃い。

津和野はその昔石見の国、4万3千石、亀井候の城下。幕末に森鷗外、西周（にしあまね）を輩出。今も江戸時代の面影を残す建物や堀などの古い街並みは山陰の小京都といわれ、多くの観光客（特に女性に人気）が訪れる。早速拝観させて頂いた地図は神社社務所二階の大広間の畳の上に広げられており、その大きさに圧倒された。想像していたよりも大きく（縦5・17m 横5・22m、別に縮尺1/2の小図あり）高い位置からでないかと全体が見えにくく、脚立を用意していなかったためカメラ撮影が出来ず、全容をお見せ出来ないのが残念です。

この写図は暦局に30年以上上出仕していた津和野藩士堀田仁助が文政10年帰藩の際、藩公への土産として持参したものとされています



翌日は写真撮影で別の予定を組んでいる野田氏、マイカーの井上夫妻と別れ、平川、中富、石川の三人が帰路についた。

途中立寄った萩では二時間ちよつとの短時間のため、昼食と「萩博物館」の見学にとどめた。近年萩城三の丸地区に開館した伝統的な武家屋敷の外観を取り入れた建物は、周囲によくマッチしており、萩地域の特質、毛利輝元以来の萩の歴史や、明治維新の吉田松陰、高杉晋

が、運搬にも大変だったのではなかるうかと余計な心配をした。なお、この「日本地理測量之図」については渡辺一郎代表理事（当時）が伊能忠敬研究8号（1996年）で詳しく紹介しているのでご参照下さい。

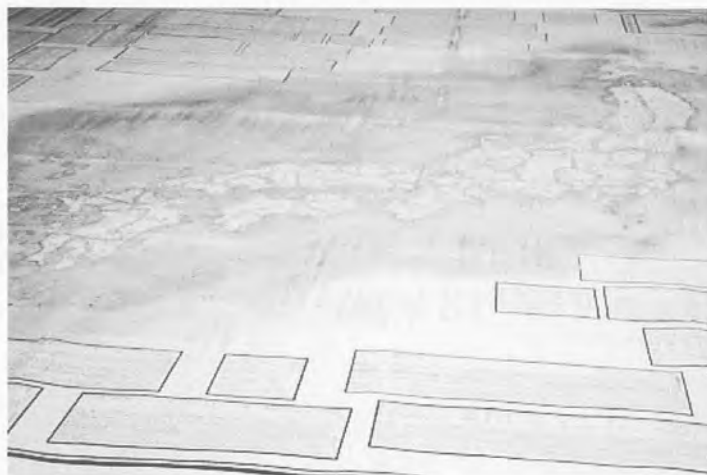
神社からの帰路、津和野の町並を散策、堀割に放たれている錦鯉などを見る。宿での夜の懇親も忠敬先生を肴に皆さんの蒞蓄のあるお話が多岐に及ぶ。毎年これが楽しみの一つ。



津和野 太鼓谷稻成神社にて
左二人目から野田、平川、石川、中富、井上の皆さん

作等の資料室も完備しており、菟学を深めたい方には一見の価値あり。
再び厚狭駅から乗車した帰りの新幹線では、ほどよい疲れと旅の話
題で本年も充実した研究旅行でした。忠敬先生に感謝！！

(いしかわ せいいち・九州支部長)



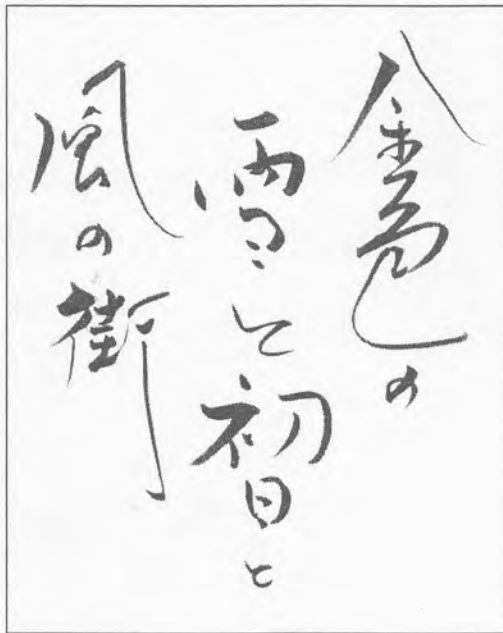
日本地理測量之図

春宵一絵一句一筆



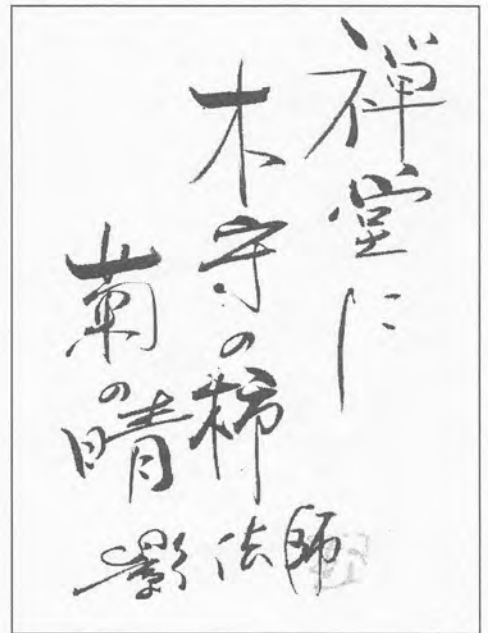
山崎町・横田
2003.12.7

思いがけなくテレビに！ 収穫から種まきへ 画・江口俊子さん



新芽から若葉へ一句陰さして

書・武川芳男さん



文化十年忠敬が遭遇した二つの別れ

杉浦守邦

伊能忠敬は文化十年九州測量中、彼にとつて最も重要な人物二人の死に見舞われる事になった。一人は佐原留守宅の跡取り、長男三郎右衛門（景敬）の死であり、今ひとりとは測量隊副隊長とも言うべき坂部貞兵衛の死である。景敬は四十八歳、坂部は四十三歳であった。

景敬の死亡日は六月七日、坂部の死は七月十五日である。死んだのは景敬の方が早い、忠敬がそれを知ったのは、坂部の死よりずっと後であった。

1. 坂部貞兵衛の死とその死因

まず忠敬が実際にその死に立ち合い、死後の世話までした坂部貞兵衛の死の模様について検討してみたい。

このことは文化十年七月二十二日付けで長男三郎右衛門宛に送った手紙（19-4、千葉県史料「伊能忠敬書状」における番号、以下同じ）に詳細が記されている。この頃すでに景敬は死亡していたが、忠敬はそれを知らないまま彼宛に手紙を送ったのである。

渡辺一郎「伊能測量隊まかり通る」p.220によると、当時忠敬らは平戸藩の五島列島測量中であつた。忠敬の「測量日記」の六月二十四日の項に「坂部、風邪引籠もり」とあるという。これが坂部の今回の病気に關する最初の情報である。二十七日に坂部は日ノ島測量を中止し治療のため福江に移っていた。

七月十三日忠敬は坂部の病気が重いと聞いて、翌十四日の朝玉の浦

から福江に急行したものである。

ここで彼は自分の片腕とも頼む坂部の死に立ち合うことになったのであるが、その次第は次のようである。

「坂部病氣之儀、前方より不宜候由二付、翌十四日陸路六里程福江町え昼頃着、直二見届候所、存之外大病二相成候間、早速浅草御役所へ大病之書状差出し、猶又無油断致療治候得共、傷寒裏症体二而、舌も黄ニ、黒ヲ兼候上ニ、瀉痢有之候間、医療も行届兼、同十五日八ツ半頃ニ致命終候。」

この文章の中に「傷寒裏症体」その他聞き慣れないことはや変つた症状があるので、それについて解説してみよう。

傷寒：腸チフスのことである。小腸下部に潰瘍を作るのが特徴。腸出血から死亡するものも多い。経過約三週間。第一週は初期。第二週は極期、この頃は嗜眠状態から漸次昏睡状態に陥る。第三週は緩解期。腸チフスの特徴はその熱にあつて、終始四十℃前後の高体温を示す事が多く、しかもそれが長く留まることから稽留熱という。坂部の場合これが記されていないのは、書き漏らしたのか、實際熱が顕著でなかったのか不明。

裏症：東洋医学では病氣の原因は大氣中の「邪」にあるとして、この邪が体内に侵入して、表面に留まったものを表証、奥に及んだものを裏証といった。また疾病部位が深いか浅いかを弁別して、邪氣が表面にあるものを表証、内臓にあるものを裏証といった。表の邪が裏に入ることあつて、腹が脹満して痛み大便が秘結し、舌苔が黄色、脈が沈実となるときは熱が腸に結したものととして、これを裏実といった、現今の腸チフスに相当する。

舌が黄・黒色：腸チフスでは口および舌に特徴ある症状を示す。初

期から口内が乾燥し、舌も乾燥し、腫脹して白苔をかぶる。汚穢な褐色を呈することもある。のち舌苔は黄色く厚く油染み、乾燥して亀裂を生じる。緩解期には剥離する。

口唇は乾燥して黒色の痂皮で覆われる。これが特徴であるので特に「煤色苔」と呼ばれる。舌唇が黄黒であればまず腸チフスとみてよい。

瀉痢：激しくほとばしるような下痢をいう。腸チフスの初期には便秘するものもあるが、第二週にはしばしば下痢を見る。下痢の回数は一、二乃至数行にして、便は希薄淡黄色、または黄綠色。それが下痢一日四、五回以上ともなれば予後は不良、多くは死亡する。

坂部の場合、高熱のことが報じられていないが、舌が黄、黒色、瀉痢があつて、傷寒裏症体というのであるから、先ず重症の腸チフスと見てよいであろう。熱が目立たないので、「傷寒裏症体」といったのかもしれない。

腸チフスの潜伏期は一、二週とされる。ただし菌数とか患者の体質により差がある。前駆症状としては全身倦怠、食欲不振、軽度の頭痛、四肢疼痛など、数日間持続して、以後階段状に体温が高くなってゆき発病を知る。熱は高くても脈拍頻度を伴わないのが特徴。

坂部の場合も六月二十四日「風邪引き籠もり」とあるが、これが前駆症状と考えて矛盾はない。

腸チフスは平安時代から日本人には多く、急性伝染病の王様ともいわれた。これを隔離するため戦前には各地に避病院まで作られた。国民の大部分が腸チフスの予防注射を受けたものである。「医制百年史」によると衛生統計をとりはじめた明治三十三年以後でも腸チフスによ

る患者は毎年三万から五万を数え、これによる死者も一万近くに及んだ。戦後急速に減少した。

チフスという語の意味はボオーとして居るという意味である。ヨーロッパではチフスの事を別名「神経熱」というように、神経系統と密接な関係を持っていて、腸チフスには必ず意識障害を伴うもので、極期には心神昏蒙、無欲状で「チフス顔貌」といわれる特有な容貌を示す。

前記の手紙では坂部の死を伝えた後、なお続きがあつて、次のような感慨を洩らしている。

「御存之通り測量ニ付候而ハ、年来ノ羽翼ニ御座候間、鳥ノ翼を落候と同様ニ而、大ニ力を落、致愁傷候。天命致方無之、十六日ニ死去ノ御届も差出し、夫より二十一日迄一七日ノ間法事も相嘗、墓碑も相応ニ執斗候。……」

2. 長子景敬の死とその死因

忠敬の長子三郎右衛門景敬は前記のごとく、文化十年六月七日に死去しているが、その死について忠敬が正式に知つたのは、結局彼が翌年五月二十二日、九州測量を終えて江戸へ帰府したときであつたのではないかと思われる。

ただ六月の初め大病を發して、きわめて危険な状態である旨だけは留守宅から知らされていたが、それがいつの事であつたかはよくわからない。

ただ文化十年九月二十一日付けで、留守宅の妙薫（三郎右衛門姉）あて、嬉野宿から出した手紙（1917）に、次のように出ている事を知れる。

「三郎右衛門事、六月初江戸表ニ而中風、半身不随ニ相成、村方」

相下り致療治候而も、即効も無之、大病二付、親類一同相談の上、中宿道喜相頼、家内の諸事御取締め被成候段、仰遣され致承知候。我等儀、三百里を隔て罷有候得ば、只痛心致し候斗、致方も無之候。若少々宛も順快致候得ば、大仕合、先は六ヶ敷ものと致覚悟候、……。」

おそらく景敬が死んだ段階で、そう遅くない時期に留守宅から九州に居る忠敬に報せたのであろうが、その際忠敬が測量御用中だったので、景敬の死を伏せて「中風で半身不随、療治しても即効無し」したがって「大病」、すなわち「予後不良」という意味を含ませて報せたのではないかと思われる。忠敬に「先は六ヶ敷もの」と覚悟させた上で、ある程度日が過ぎた段階で、正式に死亡の通知を行なうつもりであったのではないか。

ここにいう「中風」とは「卒中中風」の略で、「卒中」「中風」どちらも使われる。卒は突然の意味で、中はあたる(中毒の中と同じ)、中風とは風(ふう)に襲われたという意味である。東洋医学では、大気すなわち風のなかに邪悪なものがあってこれが人を襲うと大病を発するという思想があった。そこから邪風にあたられて撃仆し偏枯するのを中風といった。今は脳血管の損傷によることから一般に脳卒中と呼ばれる。

忠敬の心配をおそれて、すでに死去しているのに、半身不随すなわちまだ生きているということにして、すましたのであろうが、その後も事実を告げた形跡がない。

同年十一月八日付けの忠敬の手紙(17-12、妙薫・りて「三郎右衛門妻」宛)にも「本家主人大病後は」とあり、また閏十一月二日の忠敬の手紙(19-18、妙薫・りて宛)にも、「本家主人大病二付き」とあって、景敬に代わって家の取り締りをしてくれる人物の人选に付いて意見をのべている所から見ると、この頃はまだ死を知らずに居るこ

とがわかる。

文化十一年正月二日の手紙(19-9、妙薫・りて宛)・同年四月二十五日の手紙(17-4、妙薫・りて宛)も、死のことに触れていないので、この頃はまだ報されていないと見てよいのではないか。

結局、忠敬は、景敬が大病により家の取締は不可能な状態とは認識していたが、まさか死亡しているとは考えずに帰府したことが考えられるのである。

忠敬が、九州測量を終えて江戸へ帰ったのが文化十一年五月二十二日であって、景敬はすでに密葬が行なわれていたものであろうが、翌六月になって、正式に景敬の死を発表し、嫡孫三治郎改め忠誨を後嗣とするという段取りを踏んだものであろう。

景敬の病状については、発作後きわめて短時日のうちに死亡したと考えられるので、脳卒中のなかでも重い脳出血を死因と見てよいのではないかと思われる。

江戸時代の日本人の死亡原因として最も高いのは脳卒中だった。現代では、癌が最高を占め、次に心臓病(心筋梗塞・狭心症など)で、脳卒中は第三位に後退しているが、江戸時代はそうではなく、脳卒中が首位を占めた。しかも脳卒中のうち、多数を占めたのが脳出血(脳溢血)であって、いまのように脳梗塞のほうが多いという状況ではなかった。景敬の場合もおそらく脳出血による死であろう。

(三郎右衛門中風発病を伝える手紙(19-17)の存在については佐久間達夫のご教示を得ました)

(すぎうら もりくに・山形大学名誉教授、大津市在住)

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(四)

宮内 敏

五 久米栄左衛門通賢について

香川県坂出では親しみを込めて「塩田の父」と言われる通賢は、何と、伊能忠敬と兄弟弟子（麻田流天文暦学の門下生）であった。

久米通賢は同じ讃岐の平賀源内（源内が亡くなった翌年生れ）と並ぶ発明家でもある。（測量機器、兵器、揚水機、精米機、マツチ等）

しかし、最大の偉業は大がかりな塩田開発をわずかな年月で完成に導いたことである。その裏に精密な測量技術があったことが想像できる。

その地図製作技術を示す一枚の地図（測量図下書）が二〇〇二年九月、坂出市内の老舗醤油会社の蔵から発見された。

それは忠敬が四国測量を行う二年前に作成された物だという。



通賢像・かがわさぬき野



バーニア副尺式

鎌田共済会郷土博物館提供

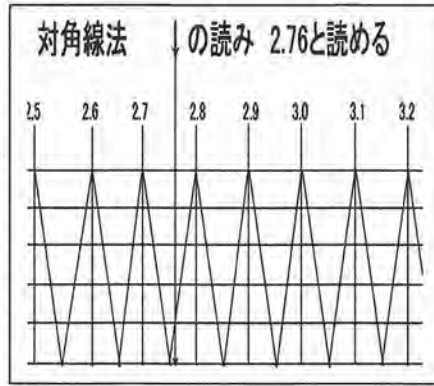
久米通賢は、安永九年（一七八〇）讃岐郡引田郷馬宿村（現在の東かがわ市馬宿）に生まれた（時に伊能忠敬三十六歳）。子供のころから天文と地理に興味を持ち、手先の器用な子供であったようだ。寛政十年（一七九八）十九歳で大阪に出て間重富（重富が松平定信の寛政の改暦の大任を終えて江戸から大阪に戻った年）に弟子入りし、四年の間、数学と天文・地理・測量を学んだ（注）。父喜兵衛が没したので一旦帰国して家を継いだ。その後度々大阪に往來し研究にとめた。故郷に戻ってから高松藩の測量を命ぜられ、文化三年（一八〇六）十一月より讃岐測量にあたる。二十六歳（一八〇六年）から測量を始め精緻な地図を成した。（伊能隊が第五次西国測量から江戸に戻った頃にあたる）久米は優秀な技術者であり独自の発明家であったので、讃岐測量の時に使用した測量機器は自作であったようだ。八分儀、象限儀、地平儀、星目鏡等が現存しており、久米栄左衛門（通賢）の名が入っている。

注 伊能忠敬は江戸黒江町にあつて高橋至時の門下、観測技術の実習に務め、学理と実際の両面を学んでいた頃にあたる。

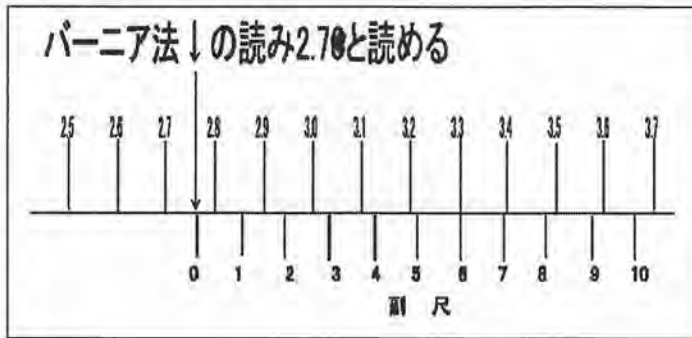
トランスバサル（対角線）法とバーニア法

久米の測量機器で独創的なのがバーニア副尺の採用である。目盛りを細分化して読み取る副尺のシステムが忠敬のもと明らかに違っていた。当時の日本では「対角斜線副尺」という方法で、忠敬もこれを使用している。バーニア副尺は既にオランダから輸入されていた航海用具の八分儀に使われていたが、久米は日本で初めてそれを測量機器に採用した。それにより読み取り最小角度は約二分となった。（精度は忠敬の二倍と云われる）

パーニア副尺が日本で普及したのは通賢の開発から五十年後である。トランスバサル法の場合、何番目の対角線と交っているかで読む(図の場合、上から下へ5までそこから上へ6で交わる)。よって2.76と読める。



パーニア式では主目盛九目分を副尺で十目にしてある。(前掲の図の場合)したがって副尺一目盛りは主目盛一目の90%である。一目で十分の一(この図の場合0.01)ずつずれる。したがって図の場合、2.7と2.8の間であるが副尺6のところ为重なっているのである。



$2.7 + 0.01 \times 6 = 2.76$ で 2.76 と読める

前図からも明らかかなように主目盛の幅が同じ場合にパーニアの方が正確に測定できることがわかる。

久米手記に見る翁一行の待遇

(鎌田共済会郷土博物館発行 讃岐の偉人久米栄左衛門翁より抜粋)

「久米手記中の、文化五年八月測量一件臆書(自筆)には松山領、今治土州に於いて伊能一行に対する贈り物及宿の待遇向き、測量用の設備として準備すべき小屋、船、人足、馬足等の数までを細々と記してあり又文化五年八月二十一日丸亀で写取の測量御用につき宇和島御領聞合帳には、伊能一行に対する国境休息小屋、雪隠の設備、荷物の運搬、宿の間割、飾付、食膳及弁当の献立、舟及人足の数、幟印献上品等が記されてある所から察すると、伊能一行十六人の測量班が幕府直隸の官吏として出張し公然幕府の用務を行うのであるから、予て幕府より巡測沿道の諸侯に対しては、厳正なる通牒も発せられていたので各藩は何れも、此一行に対しては万般の取扱待遇に関して、頗る鄭重を極めたものであるから、栄左衛門は他藩に於ける待遇状況の調査をもして、一行が高松に入れば測量上の便宜を計るは勿論、且つ其一行に対する取扱待遇上にも、些の遺憾なからしめんことにとつとめるという重大任務を帯びたのである。」とある。

久米は文化五年の伊能忠敬の讃岐測量に際して、案内役として参加し、文化六年(一八〇九)には認められて、高松藩「天文測量方」になり、「久米」を名のることを許された。

(参考文献 鎌田共済会郷土博物館資料・東かがわ市歴史民俗資料館資料、香川県情報誌かがわさぬき野)

注 伊能測量隊の待遇 第一次は試し測量の段階、自費自弁でやれと言わんばかりの一日銀七匁五分、第二次は一日銀十匁、第三次は年額六十兩、略実費を償うにたる手当て、無賃の人馬徴発の特権、木賃払いを許された。かなりの待遇改善。第四次は八十二兩二分人、馬長持

ち人。第一次から四次までは言わば官府後援下の測量であったが、第五次からは幕吏に登用され、御用測量となった。待遇も格段に良くなり、翁の旅扶持一日五升、雑用金一ヶ月三兩二分、宿泊料一ヶ月銀四三匁、別手当て一日銀四匁、その他下役、門弟それぞれに手当てを受け、筆、墨、紙、蠟、燭代まで支給されている。それに呼応するよう第一次〜四次までは殆ど贈り物の記載がないのに比べ、第五次からは地方での贈り物が多くなっている。受け入れる地方の気の使いようが推測できる。特に四国、九州など西国で多い。

伊能忠敬測量日記にみる久米栄左衛門に関する記述

(伊能忠敬測量日記 佐久間達夫校訂より 久米栄左衛門記載部分抜粋)

① 同(八月)二十九日朝曇天。下川辺、青木、稻生、善八、昨日打止布留川村海辺より初、喜多村を経て船屋村字立石迄測、九ツ後帰宿。(我等、坂部、柴山病氣。稻生出勤)讃州高松家中久米栄左衛門(菓子箱持参)來向。(西条城下)二十九日、伊能忠敬外二人は病氣の為測量を休んだ。此日久米は伊能を宿に訪ねた。(讃岐の偉人久米栄左衛門翁記述より)

② 同(九月)二十日 大曇天。多度津出立。丸亀城下へ四ツ前に着。岸本九太郎、久米栄左衛門来る。深更不逢。

③ 同(九月)二十二日 朝晴天。朝飯後、金毘羅詣。直に金光院へ立寄座敷一覽。それより松尾町 内町一同出立。九ツ後丸亀へ帰着。高松家久米栄左衛門来る。此夜晴天測量。

④ 同(十月)四日 朝晴天。六ツ前宇足津出立。久米栄左衛門、並びに郷方役人日々出勤。

⑤ 同(十一月)三日 前夜七ツ前より大風、又曇る。津田村出立。午前中より又風、久米栄左衛門日々付添案内。朝夕共に出る。

⑥ 同(十一月)九日 暁より雪。屋根は一寸、地上は五六分積る。

同所(撫養岡崎村)逗留。高松久米栄左衛門来る。同(十一月)十日 同所逗留。同(十一月)十一日 朝晴天。西風強し。淡州渡海難成いうに見合。久米栄左衛門帰る。四ツ後風少止というにより岡崎村出立。乗船九ツ後淡州三原郡福良浦へ着。

久米栄左衛門は西条城下で伊能忠敬を訪ねて(八月二十九日)から、伊能隊が淡路福良へ渡る(十一月十一日)までの七十日余りの長期間伊能隊とお付き合いしたことになる。

六 平賀源内と伊能忠敬に接点があったか

伊能忠敬は源内の量程器を知っていたか?

平賀源内は享保十三年(一七二八)高松藩の御米蔵番の子として志度浦に生まれる。二十一歳の時に父親を亡くす。藩主松平頼恭に認められ登用され菓草園で朝鮮人参畑を担当するが、同僚や上司の反発をかうことになる。宝暦二年(一七五二)長崎に遊学し、一年間本草学・オランダ語・医学・油絵を学ぶ。後に江戸行きを目指すようになり、宝暦六年(一七五六)家督を譲って、小伝馬町の医師千賀道隆(田沼意次と関係が深い)を頼って江戸入りする。その後、本草学者の田村元雄(藍水)に弟子入りし、元雄の保障で湯島聖堂の寄宿舎に入る。宝暦七年(一七五七)第一回物産会「東都薬品会」を会主田村元雄として開催する。江戸での活躍が高松藩五代藩主松平頼恭の目に留まり、宝暦九年(一七五九)九月、再度高松藩に召し抱えられる。しかし、源内は翌宝暦十一年になると辞職を望むようになり、藩という枠の中の博物学者の役目は、わずかと二年で終わった。その後、再度江戸入りする。物産会は五回行われ成功させている。

源内の人脈は大いに広く太くなっていったに違いない。源内と田沼

意次との関係がどのようなものであったか不明だが「田沼は高松藩松平頼恭への遠慮から幕府雇いとすることをひかえた」が、「源内は医官の千賀道隆とその息子道有とを介して田沼とは個人的な意思の疎通までできる関係にあったようだ」という。(平賀源内を歩く・奥村正二著)



高松藩讃岐は生駒家領だったが、一六四〇年藩内抗争から出羽矢島(二万石)へ減転封となる。後、讃岐一国は伊予西条・大洲・松山の三藩の預領となる。東讃岐には高松を城地として水戸徳川頼房の長男、水戸光圀の兄、松平頼重が常陸下館から十二万石で入って水戸連枝親藩としての高松藩が成立した。

林家との関係は湯島聖堂に寄宿しているから当然だが、源内が一七五九年松平頼恭に伴って帰国する際、林大学頭鳳谷から餞別の五言絶句の詩を贈られている。このことから関係の深さが察せられる。

伊能達の母方の実家で忠敬の仮親である平山季忠は林鳳谷の門弟であり、幕府薬草園の田村元雄や平賀源内と交流があった。源内の物産会に下総産の「海鏡」(月日貝、殻表は黄白色もう一方は濃赤色二枚貝)、「石髓」(鍾乳石の一種?)などを出品している。(多古町史)

源内が江戸入りしたとき忠敬は多感な十代前半であり、平山季忠は向上心旺盛な忠敬を伴って源内に面会した可能性が大いにある。そうだとしたら多芸多才な発明王の平賀源内に魅力を感じないはずがない。医学や天文への夢もこうした中から生まれたのかも知れない。

平賀源内は宝暦五年(一七五五)量程器(現在の万歩計のようなもの)を作っている。伊能忠敬も量程器を作っている。忠敬の量程器は第二次測量に使用されたが、路面の凸凹が激しく充分に機能しなかった。

距離の測定には間竿や間縄、鉄鎖などで行っているが歩測も用いている。小さな車輪の量程車より、訓練された歩測の方が正確であつたらうことは十分に推測できる。

伊能忠敬が測量に携わるのは平賀源内が量程器を作ってから二十五年、源内没後十五年である。平賀源内は不幸な獄中死をしており、忠敬が測量に赴く頃の源内に対する社会的評価はどのようなものであつただろうか。伊能忠敬の記録の中に量程器も平賀源内の記録も見当たらない。

伊能忠敬は源内の量程器を歩測にどの程度利用したのだろうか
モノづくり日本江戸大博覧会出品「歩度計」の説明文の中で国立科学博物館理工学研究所鈴木一義氏は「平賀源内のもものも現存し、伊能忠敬も全国測量に使用した」と書いている。

伊能忠敬と同門の久米栄左衛門(麻田剛立門下の間重富の弟子)は平賀源内と同郷の讃岐出身で後輩である。当然ながら久米は源内の影響を受けている。

久米は平賀源内の発明品である平線儀と同様のものを作製している。多彩な発明王家という点でも久米栄左衛門は平賀源内に似ている。違いは源内が江戸に出て全国区になったのに対し、久米は地方に留まったことである。



平賀源内の量程器・鎌田共済郷土博物館

伊能忠敬と久米栄左衛門は四国測量で七十日間にも亘つて関わっている。測量機器や技術に関する話題はなかったのであるか。三十五歳の年齢差はあるにしても、師こそ違うが同門の麻田一門であり、久米は前述したように先進の測量機器の自作を行っている。また、讃岐の測量は忠敬四国測量の二年前に行っている。測量に関する話題は当然あったと思えるのだがどうであつたらう。

忠敬（幕府御用）と久米（藩の案内役）の立場の違いがそのような話題にさせなかつたのであろうか。興味もたれるところである。

田沼意次と聞く代名詞のごとく賄賂政治が浮かんでくるが、最近田沼に対する評価は変わってきている。田沼時代は異学も認め発禁のなかつた時代である。宗教書以外の洋書はかなり入ってきていたし、出版も比較的自由であつた。そのような自由な時代であつたから杉田玄白、前野良沢の解体新書も発刊できたし、源内のエレキテルも問題にならなかつた。科学的な見方が優先され能力ある者が登用された。田沼は幕藩体制の中に民間の活力を取り入れた。平賀源内が自由に活躍でき、伊能忠敬の全国測量が可能になる素地も田沼時代があつたからこそではあるまいか。

（資料協力 富吉繁貴氏）

七 新地嫁取りに関する書状

伊能忠敬書状 千葉県史料近世編 文化資料一

二二二 (3-2) より 抜粋

新地より中宿藤左衛門ヲ以、潮来宮本「平太夫娘を唄二貫ヒ申度旨、其方江」相談有之候ニ付、我等承知致し申間敷、「御あいさつ被成候得共、是非二願くれ候様」被相頼、無拠仰遺され承知致し候、「扱宮本家柄并高田清左衛門縁組之筋、」前々ハ大家ニ而不相当ニ候得共、近年ハ困窮ニ相成候よし、当時新地縁

組随分「不苦哉と存候、只庄作儀性質静」魯なる斗にて、家事執斗才覚等」一切ニ無之候間、本家ニ而二、三年も奉公」為致、執斗方かなりニ相成候上にて、「妻も為持可申存候、其上新地も無尽金」取納り不申候而は、身上向暮し方も相分り」申間敷候、当時ハ本家、永沢本家両家共「身上向キ六ケ敷、逼塞致し候時節、」不取極の新地にて取急キ嫁を取候ハ、「自然と物入ハかり、行々可也ノ相統も」無覚束候、尤庄作儀性質なる斗にて、「才覚才知も無口候得ハ、急度新地相統ノ」器量も不相分候、本家ニ而二、三年も働かせ、「心体才覚見届ケ、其内ニ無尽ノ納り方」暮し方振合見届ケ、嫁ヲ取候ハ、「大丈夫と存候、無尽金納り方年々暮し方も」不相分、取急キ嫁を迎候上ニ而、暮し方「井二庄作弥不器量ニも候ハ、進退惟窮」と申ものニなり、外聞も其身もツマラヌ事ニ」相成候、当家の株敷相応ノ身上さへ、「借用の為ニ逼塞致し候、今三、四年も」見合、夫ニ而も身口向直り不申候ハ、「佐原家内ヲ不残我等方江引取、是非ニ」本家ヲ大丈夫ニ相統致候様と工夫致候、「其考ニ而ハ新地此度之縁組甚以不安心と」存候、新地兩人より無拠相談を差留様ニ而、「甚氣之毒ニ候得共、身上ノ浮沈一大事之」事ゆへ、我等存寄無遠慮申遣し候、「右之段新地御兩人、名主藤左衛門又庄作へも」能々御申談し可被成候、尤宮本ノ娘当十四才ニ」御座候よし、是も二、三年相延候而も宜候、「夫共取急キ婚姻致し、其後身上向」差支、致難儀候而も不苦と被致覚悟候」ハ、無是非候間先方ノ存寄宜候、下拙ハ庄作儀」ニ、三年相タメシ不申候而ハ安心不致候、「猶追々可申入候、以上

十二月十日

伊能勘解由

妙薫殿

書状の新天地とは・初期の頃、伊能茂左衛門宅付近を新天地という。伊能七郎右衛門豊秋の次男が新天地に分家する。庄作を養子にしようとした。

庄作とは・忠敬の兄、神保貞詮の二男で測量隊に供侍として同行した神保庄作(延宜)と推測できる。伊能忠敬測量日記では庄作、旅中日記では庄助とある。神保庄作のこと。

潮来宮本平太夫について・宮本家は代々、平右衛門又は平太夫を名乗る。忠敬近傍では

九代平太夫俊道 「文化十二年(一八一五)三月一日没」

十代平右衛門高重 「天保九年(一八三八)五月十日没」

(高田村宮内清右衛門正壽の第四子)

十一代尚一郎 「文久二年(一八六二)六月二十五日没」である。

高田清左衛門筋について・

高田村、宮内家は代々、清右衛門を名乗っているが、十世正賢(正壽)「文化五年(一八〇八)十二月二日没七十二歳」は、後妻の父が御殿医(遠江浜松坂輪玄瑞)であった関係から老中田沼意次を介して印旛沼・手賀沼・長沼の干拓を手がけるが巨資を投ずるも田沼が失脚し失敗に終る。(筆者家資料より)

忠敬書簡の「前々ハ・近年ハ困窮ニ相成候よし・」と合致している。

その後、長男定鷹に清右衛門を譲り隠居して清左衛門を名乗り浜宅と称した。書簡どおりとすれば十世正賢(正壽)以外に清左衛門を名乗った者はいない。高田清左衛門筋とは「十世宮内清右衛門正賢(正壽)」である。

正賢(正壽)の長女ウタが宮本家九代平太夫俊道に嫁すが、子無く俊道の妹阿連以(オレイ)を養女とし、ウタの弟高重(三男)が婿養子となり十代平右衛門を継いでいる。

十代平右衛門高重の子には、長女ミヨ、長男鼎吉(篁村)、次男尚一郎(茶村)二女ミチ、三女ミヤの五人がいる。

書状の娘十四歳とは誰か

書状の娘は高重の子、長女「ミヨ」、二女「ミチ」、三女「ミヤ」、か。次男尚一郎(茶村)の長女「たに」のいずれかと考えられるのだが、忠敬書簡は妙薫宛なので、一八一〇年代(妙薫に改名した年)以降一八一八年(忠敬没年)までの八年間である。

宮本尚一郎(茶村)は、一七九三年生まれなので、一八一〇年前半は二十歳前後であり、当時十四歳の父とは考えられない。

高重の二女ミチ(美知)は記録によると文政二年(一八一九年)九月二十九日十一歳で亡くなっている。三女ミヤは年齢的に該当しない。よって書状の娘十四歳は高重の長女「ミヨ」(茶村の姉)と考えられる。長女ミヨは高田村宮内清右衛門十二世胤繁の配となつている。三女ミヤは上総稚崎村布留川甚左衛門に嫁し、明治三十六年に没している。結果的にこの縁談は成立しなかったことになる。

この年代以前では宮本家から阿留世が伊能茂左衛門家七代景良(魚彦)に嫁している。延享四年十七歳で没している(正定院遊観玉泉大姉)。宮本家からはその後も九代伊能茂左衛門家をついでいる。

(みやうちさとし・伊能家縁戚、濱宅宮内家17代当主) つづく



源烈公(徳川斉昭)から尚一郎(茶村)の父高重への書簡 潮来町教育委員会資料

濱宅宮内家所蔵資料から（その一）

宮内 敏さん提供



銚子の濱宅宮内家には江戸期から明治期の貴重資料が残されています。現当主の宮内敏さんのご好意で所蔵資料が公開されます。古文書では村役関連資料（水帳、地引帳、村絵図、地租改定資料など）家業関連資料（廻船、漁業、酒造、裁判記録など）に骨董品、伊達家拝領品、掛け軸、墓石拓本など多岐に涉ります。本誌で順次掲載いたします。どうぞご期待下さい。(F)

伊能忠敬と会津街道

松宮 輝明

伊能忠敬測量隊の宿

伊能忠敬は18年の歳月をかけ世界に誇る日本全図を作りあげました。1800年(寛政12年)旧暦4月19日に江戸深川の黒江町を出発し第1次観測を始めます。伊能忠敬が55歳の時でした。

最初の観測の目的は『子午線の測量』即ち地球の大きさを計るための緯度1度の長さの測量データを得るための天体観測でした。緯度1度の距離が正確に測定できれば、360倍すると地球の大きさがわかります。第1次観測は奥州街道を観測しながら北上し、青森三厩より蝦夷地に渡り函館、室蘭、釧路、ニシベツまで測量し帰路奥州街道を南下し江戸に戻りました。1801年(寛政13年)第2次測量は、最初本州東海岸を経由して蝦夷地に渡り、蝦夷地では西海岸まわりで択捉(エトロフ)の島と、それに相対するウルップ島までの測量を計画しましたが津軽半島、下北半島を測量し奥州街道を南下し江戸に戻りました。

第2次測量は旧暦6月19日江戸を出発し本州東海岸、房総半島、水戸、福島県の浜通りを観測しながら仙台、男鹿半島、三陸海岸、下北半島、津軽半島、青森、野辺地、そして奥州街道を南下しました。

第2次測量の帰路11月26日奥州街道沿いにある福島城下では本陣黒沢六郎兵衛宅、27日には本宮宿の塩谷三四郎方に泊まり、28日須賀川宿三沢源左衛門方、29日白河城下因幡屋茂兵衛方に泊まりました。1802年(享和2年)第3次測量では会津街道沿いにある須賀川市長沼に泊まり天体測量を行いました。須賀川には3度訪れ2回天体観測を行いました。1回は夜曇り空で天体観測は実施できませんでした。

た。

このたび、伊能忠敬記念館の紺野学芸員とのお話の中で、伊能忠敬測量隊7名が宿泊した宿の所在が知りたいとの要請がありました。早速郷土史家の先生方の協力をいただき調査を始めました。第1次測量と第2次測量で白川宿是因幡屋茂兵衛宅に泊まります。因幡屋は白河城下町割の史料によると、「無役、表間口六間六尺五分同断酒蔵渡世岩淵兵右衛門」との記録が見つかりました。

白河城下で伊能忠敬は最初心当たりの宿に着きましたが、大変手狭な家でしたので、因幡屋茂兵衛宅に宿替えをしました。ところがこの主人は、伊能忠敬の実家のある下総佐原で丸屋伊右衛門という者の酒蔵を借りて酒造りをしていた丸屋清吉といい、近江(滋賀県)出身の人で、丙年の年に大阪での米相場で損金を出して、この白河へ来たとの話です。

忠敬と宿の主はさぞ驚いたことでしょう。この夜は酒肴でもてなされたこともあって、因幡屋の女房へ二朱銀一枚(約五千元)を与えたそうです。このような再開の不思議さをかみ締めながら、忠敬は日記に克明に書いております。



白河 10万石松平定信の居城
「小峰城天主閣」

伊能忠敬隊第三次測量の宿

57歳の伊能忠敬は1802年(享和2年)第3次測量は測量隊員7名、幕府の公費支給額は60両(現在貨幣価値約240万円)でした。現在の貨幣価値に比べると低い金額ですが、伊能忠敬は大豪商でしたので、自費で測量の費用を賄いました。旧暦6月11日に江戸を立ち10月まで132日をかけて1701⁺の行程を陸奥(白川、上小屋、長沼、三代、福良、会津、裏磐梯、槍原)の地を測量しました。早稲沢を越え出羽の地に入り、山形、秋田、青森の津軽半島を測量し、南下して新潟、群馬、埼玉を測量、江戸に戻りました。

6月19日奥州街道(陸羽街道)佐久山宿(栃木県大田原市佐久山)を出立し越堀宿(栃木県黒石市越堀)へ九ツ後(正午)に着き、堀越宿の本陣河内屋源蔵宅に泊まり、この夜、天体観測をしました。

6月20日伊能隊は朝六ツ半(7時30分)頃越堀宿を出立しました。県道大田原芦野線を通り芦野宿に着きました。次に国道294号線を北上し栃木と福島の間境「境の明神」を越え白坂村内(白河市白坂)の明神村にある、脇本陣岩井屋庄三郎宅に八ツ後(午後2時)に着きました。夜は晴天で天体観測しております。忠敬は境の明神については大変興味を持ち、日記に詳しく由来を書き止めております。

6月21日には奥羽街道白坂を六ツ半(午前7時)に出立し皮籠村(白河市皮籠)を経て白川宿本陣芳賀源左衛門宅へ四ツ(午後9時過ぎ)頃遅い到着でした。早速、玄関口に伊能旗を掲げます。伊能旗は紫色で『御用・測量方』と書かれ、幕府測量方の威厳を知らしめるための御用旗でした。伊能忠敬は幕府天文方の役人として取り立てられ、懐中には測量を命ずる幕府の公式文書を携行しております。宿泊や案内を要請する先触れには写しを添付しました。また、第3次測量から

馬に乗ることが許されました。1801年(享和元年)松平定信が白河郊外に四民共楽の南湖公園を造成しておりますが伊能隊は南湖公園への道は通らず、九番町を左折し白河城下に入りました。伊能忠敬に南湖公園と白川の関をぜひ見て欲しかったとの思いがします。

本陣の芳賀源左衛門宅の所在について調べました。1823年(文政6年)葵末白川城下元町の町割りの中に「表間口拾六間九寸芳賀源左衛門同断(前のとおり)旅籠屋渡世彦四郎無役」の史料があります。渡世とは生業をいいます。無役はこの時期名主や検断、問屋等の町役は拝命されておりませんでした。本陣の斜め向かえには「表間口拾老間三尺裏行式拾間菓子渡世藤兵衛無役」と大きな店舗がありました。白川城下の町割りは細かく記載されており、家屋敷の所在が解り貴重な歴史的史料です。



下野国と陸奥の国境、境の明神に建つ
「従是白川領」の道標

第三次伊能測量隊白川を出発

伊能忠敬は白川で江戸へ書状を送り、会津街道(白河街道)の村々に泊触れを出しました。

泊触(原文のまま掲載)

我等儀測量儀御用、明22日白川出立、会津若松迄右之泊順罷越候間、先触之通宿用意可有之、且雨天ニ候得ハ測量難儀相成、其所ニ滞留天氣次第日出立致候間、差支無之様斗可給候、泊触之儀物若松ニ而我等止宿江可被相返、以上

戌六月二一日

伊能勘解由印（忠敬の隠居名）

22日白川初 飯土用休 上小屋泊 23日牧ノ内休 永沼泊
 24日勢至堂休 見代泊 25日福良休 赤津泊
 26日原休 赤井泊 27日若松泊

右宿々村々 問屋 名主 年寄中

江戸を出立時、奉行所からは道中奉行、勘定奉行、5名が連署したお触れが各藩に出されておりました。行き先々の役所より村々の問屋、年寄り、名主、組頭にお触れが伝達されました。泊触の内容を要約すると、我等は会津街道の村々で幕府御用により測量を行う。明日6月22日白川を出立し、会津若松迄以下の宿泊の順序により罷り通るので、この間、先触の通り宿舎を用意する事。且し、雨天の時には測量は出来ない。其所に滞在して天気次第日延べし出立する。差し障りのないように。泊触の儀は若松まで我等の宿泊を通知する。

また、江戸の伝馬役馬込平八（諸街道の伝馬扱いの元締め）より、宿駅に通達が出されています。「伊能勘解由様が北国筋海辺測量御用で江戸を御出立になる。勘定奉行様方御連印の御証文を差し遣わされるので伝達する。御印物なので、墨をつけたり、汚したりしないよう大切に扱い、継ぎ送れ」の書状が出されました。

各宿駅では写しを作り保管し、添え書きをつけて次の宿駅に送りました。

飯土用村の旅籠

6月22日6ツ（午前6時）白河を出立し会津街道の大谷村（広谷地）を通り、飯土用村（白河市大信飯土）で昼食を取り、滑川村を過ぎ上小屋（白河市大信上小屋）に八ツ（午後2時）前に着き、内山茂市宅に宿を取りました。伊能忠敬測量隊がたどった会津街道（別名白河街道）を尋ねてみました。白河市の女石より国道294号線に入り飯土用村に着きました。飯土郵便局長高橋昭市氏は「私の先祖は、昔この飯土村で旅籠を生業としておりました。村には旅籠は2軒あり私の家は中屋といい今の郵便局が旅籠跡です。隣には旅籠みなど屋がありました。名主は斑目家で問屋も兼ねていましたが、今は一族の人は飯土にはおりません」と話されました。伊能測量隊はこの村のどちらかの旅籠か問屋で昼食を取ったのでしょうか。

高橋氏は村外れにある毘沙門堂に案内して下さいました。昔は茅葺屋根の社で不動様が奉られておりました。村人の信仰を集め、真新し



会津街道沿い飯土用村毘沙門堂前の石碑



史跡『飯土坂一里塚』

い赤い前掛け姿で静かに鎮座しておりました。お堂の入り口には馬頭観音像、二十三夜など多くの板碑や灯籠が立ち並び会津街道の古い歴史を感じさせられました。その石標の中に右、滑川村、左、羽太村の道標がありました。

会津街道を進むと坂道に差し掛かり、飯土坂の右側に一里塚があり、塚には杉の木と紅葉の木が植えられておりました。

上小屋本陣大庄屋内山茂市宅

旧暦6月22日6ツ(午前6時)白河を出立し会津本街道の大谷村(広谷地)、飯土村(白河市大信飯土)で昼食を取り、滑川村を過ぎ上小屋(白河市大信上小屋)に八ツ(午後2時)前に着きました。そして上小屋の本陣内山茂市宅に宿を取りました。会津街道は幕府より派遣された諸国巡見役や御国目付などの会津入りルートとして重要な街道でした

伊能忠敬は下総佐原の大富豪ですので滅多に褒めることはありませんでした。しかし伊能日記には内山宅を「家作よし」と記録しております。日記を読むうちに本陣で大庄屋の内山家の家作について興味湧いて参りました。

このたびの白河市大信限戸上小屋の内山家の訪問で納得が行きました。当主内山正樹氏は取材訪問に暖かく応対して下さいました。

内山氏は「当家は本陣、大庄屋、問屋として酒、味噌、醤油などの醸造業を行っておりました。家は総檜作りの立派な御殿でしたが、昭和23年3月31日にもらい火で全焼してしまいました。先年会津より茅葺職人を呼び2年掛りで屋根の吹き替えを終えたばかりの火災でした」とと小学3年生の時に起きた出来事を生々しく話されました。伊能忠敬が内山家に泊まり、天体観測を実施した事を話すと、内山氏は

「初めて知りました。伊能忠敬測量隊が泊まり、観測したことは、大変名誉なことです。この上小屋村は村興の一環として栃木県黒羽町に習い町並みに本陣、旅籠白川屋、車屋、髪緒屋、帳場、高札場などの屋号を掲げ各家の生業を標記しております」と話されました。

内山家と親

威の元大信村文化財審議委員長で八幡神社の禰宜の増子克紀先生は「内山家の先祖は源頼朝の家臣三浦平太郎為道です。会津芦名氏の重臣として三浦半島より会津に移り、戦



本陣、問屋、大庄屋の内山家・伊能忠敬を迎えた表玄関

禍を逃れ上小屋に落ち着きました。代々、本陣、大庄屋、問屋を勤め白河藩松平家より手当てとして23石の禄をいただいております。内山家は神道でこの村全てが八幡神社の氏子です。内山家は間口17間半(約34坪)奥行8間(約16坪)の堂々たる作りの家作でした。蔵が5棟ありました。上小屋の土地は全て内山家の所有でしたが、戦後の農地解放により45軒の小作人に解放しました。八幡神社には金の仏像が奉られておりました。この仏像を白河藩主松平定信公が気にいり差し

出すと、定信公は金の仏像の代わりに直筆梅鉢入りのお札を賜りました。金の仏像は名古屋徳川美術館に所蔵されており「まず」と語り、文化己年に描かれた内山茂市の肖像画と内山家の見取り図を見せて下さいました。

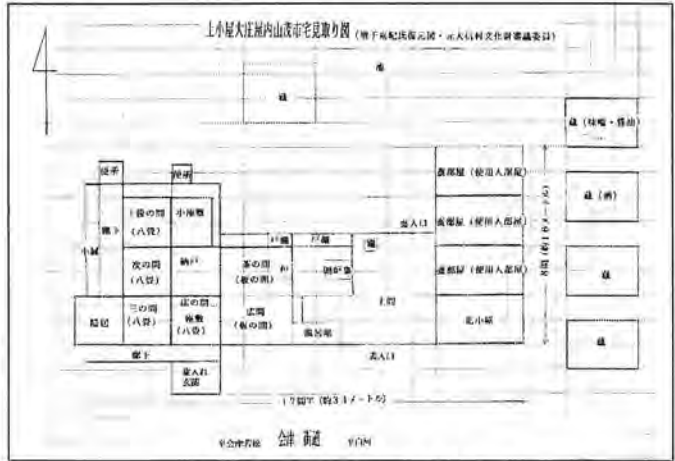
内山家の屋敷は二千石旗本格式の庄内藩酒田の豪商本間家と同じ大きさです。本間家は間口17間（約33・6尺）、奥

行8間半（約16・5尺）とほとんど同じ造りです。

内山家を辞し、帰路田圃より聞こえる蛙の声を聞きながら、夏の夜空を仰ぎ、伊能忠敬は上小屋の大豪農内山茂市よりどの様なもてなしを受けどの様な会話を交わし一夜を過ごしたのでしょうか。満天の星空から同年代の二人の声が聞こえてきそうです。

長沼の本陣矢部唯左衛門宅

6月23日上小屋の本陣内山茂市宅を出発し、長沼（永沼）の宿に向かいます。この時、間道の安養寺新田村（天栄村後藤・後藤焼、松平



上小屋大庄屋内山茂市宅見取り図

定信が焼かせたと言われる隠れ窯）を通り牧野内村（天栄村牧之内）で休息しました。「上小屋と牧野内との間に二峠があり、左右大きくうねうねし山には小雑木斗り（通り）、木無し、山を過ぎて巾凡4町斗り、横巾10町斗り山合に田あり」と記録しております。八ツ（午後2時）頃長沼村に着き、本陣矢部唯左衛門宅に泊まりました。長沼村は松平播磨守の陣屋がありました。この度の調査で陣屋跡と、本陣跡がなかなかわかりませんでした。「長沼町は大火にあい町割が現存しません。陣屋は殿町の須賀川信用金庫の跡にあり、本陣矢部唯左衛門宅は長沼金町にありました。近くにチリチリ川が流れております」と須賀川市文化財審議委員永山祐三氏が話されました。この夜は晴天で星を観測しました。夕食後夜になって観測が開始となります。長沼村での観測記録は残念ながら紛失して現存しません。



ちりちり川の標石

伊能測量隊勢至堂峠に行く

6月24日六ツ（午前6時）後長沼村を出立し下江花村、上江花村を経て2里2丁勢至堂に至り昼食を取りました。この時勢至堂の本陣は普請中で休むことが出来ませんでした。

「ここは会津領界で安積郡なり」と記しております。須賀川市勢至堂宇屋敷の石井周次、善人氏兄弟を訪ねました。

石井家は代々勢至堂の旅籠をしておりました。勢至堂の宿場について尋ねると、石井氏は「勢至堂峠には一里塚が残っております。この会津街道は豊臣秀吉が天正時代に会津仕置で往復しております。勢至

堂峠の古道には石畳が残っており、太閤道分岐点があります。とうとうと流れる『殿様清水』が湧き出ております。秀吉は荷駄の紐を結び直し、清水で喉を潤したのでしょうか。勢至堂峠の頂上には茶店が二軒ありました。勢至堂側は石井家の旅館が茶店を出し、会津領三代見代上平は磯貝家の茶店がありました」と峠の古道を案内して下さいました。石井氏に勢至堂の本陣について尋ねると「須賀川市勢至堂の宿場は最盛期で人家が40軒ほどありました。勢至堂の宿の本陣は柏木家が代々勤めていたが、今は一族の方々は任んでおりません。本陣跡は畑になっております。伊能忠敬が勢至堂で昼食を取ったことは初めて知りました。この宿場の新しい歴史になります」と話されました。

伊能日記には「勢至堂に至るまでは山合で上平、唐沢（会津の蕃所で家50軒あり）まで下る」とあります。三代の上平にあつた会津藩の蕃所は勢至堂峠を下った最初の集落ですが、現在は二軒の民家があるのみです。道筋の左側に馬宿の星家があります。星氏に尋ねると「私の家は馬宿で隣が蕃所でした。今は畑になっております。蕃所には会津藩の侍が4名ほど詰めておりました」と話されました。

猪苗代湖より磐梯山を望む

三代までは
谷合平道なり
2里2丁八ツ
(午後2時)頃
測量隊は三代に
着きました。村
役が刀を差し上
平の蕃所まで出



勢至堂峠下の一里塚

迎えました。一行が到着すると郡役所の「物書き川田乙四郎」が見舞いに来ました。(会津お目見以上なしと云う)

三代の止宿は本陣を勤める大庄屋二瓶文右衛門宅で会津領郷頭です。本陣の主が伺いに来ました。この夜は晴天で観測しました。

三代にお住まいの会津史学会理事、石井義八郎氏(83歳)を尋ねると「大庄屋二瓶家は斜め向かへの家です。三代町の交差点角左の大きな屋敷です。現在も二瓶家の子孫がお住まいです。私の先祖は三代上平の会津藩の蕃所に勤めておりました。蕃所には4名の者が詰めておりました。明治になってから、一名が士族に取り立てられました」と蕃所詰の名前を見せて下さいました。

6月25日五ツ(午前8時)前に三代を出立し1里で福良に至ります。この間、谷合小坂一ヶ所福良は左右に田が多くあり。五ツ半(午後5時)後福良に着きました。途中雨が降りやみました。18丁で赤津に四ツ(午前10時)頃着き「所持持ノ猪苗代湖水の端に至り一覽」しました。「猶舟に乗って名所を見る」

赤津より湖畔の青松ヶ浜の港に出て猪苗代湖の風景や磐梯山の秀峯を見物しました。磐梯山は明治21年に大噴火をしており頂上の3分の1が吹き飛びました。猪苗代湖は日本で琵琶湖に次いで二番目の大きな湖です。猪苗代湖より眺め仰ぎ見る磐梯山は素晴らしい眺めであった事でしょう。七ツ(午後4時)頃宿に帰り岐路段々大雨になりました。この宿は赤津の名主の吉田新右衛門で、観測器材を据え付けましたが雨のため観測出来ませんでした。名主の吉田新右衛門家宅は会津街道の道筋にあります。

湖南町赤津字南町の良田長造氏に尋ねると「私の家は名主吉田新右衛門とは縁続きです。吉田家は街道の右側にあり、子孫の方は住んでおりません。この地は気温が低く桜の花も会津若松の町より10日は遅

く開花します」と話されました。

6月26日朝四ツ(午前10時)前赤津を出立し高坂、東田面村の内開場(堰場)は家数20軒程、を経て1里30丁22間原宿村に4ツ(午後10時)後に着きました。止宿は本陣坂内市郎右衛門家で会津領郷頭です。この日夜曇って観測出来ませんでした。この日は大いに冷えて袷(あわせ)を着ました。本陣の坂内市郎右衛門宅は会津街道筋原宿の左側にあり、現在、子孫の方は会津若松市原郵便局長になっております。

6月27日朝は曇天で涼しく袷(あわせ)と襦袢を着ました。六ツ(午前6時)後原宿を出立し、山合平ら道西田面村に至ります。上馬渡村、下馬渡村、人家は山根にあり、行路も山際、万代山(磐梯山)を測量しました。方位は子(ね)〔北30度〕半円方位盤を用い測定、23分45秒、赤井村入り口、同篠山あり、

1里半にして赤井駅、金堀村、滝沢村、赤井より2里若松城下「松平肥後の守居城」八ツ(午後2時)頃に着く、この日四つ(午後7時)頃晴天、初め段々晴れ午前気温が上昇し暑くなりました。赤井と金堀村には間道があります。金堀と滝沢村の間には大峠あり、即滝沢峠といえます。鶴が城入り口に2人の侍が先払いをとり待っております



猪苗代湖青松ヶ浜よりと磐梯山を望む

た。到着後町方役人池田与五郎見舞いに来ます。(会津目見以上なり言う)川田乙四郎も来ました。この人は三代宿、福良宿、赤津宿、原宿まで見舞いに着きました。止宿本陣問屋検断兼帯菊池傳十郎宅です。この夜七日町で観測しました。

6月28日は本陣菊池傳十郎宅に止まり道中の観測データを整理しました。全行程の中で伊能測量隊が連泊したのは会津若松と檜原村、山形新庄だけでした。

大塩村の製塩

6月29日若松城下を出立し上高野村入り口で万代山(磐梯山)を測量しました。方位盤による観測結果は(丑「うし」30度)29分半、下高野村入り口で厩山馬頭峯(丑「うし」30度)18分40秒、厩山惣高(丑)12分50秒、笈川村では厩岳は辰戌に見えました。万代山は厩岳の後方に見ることが出来ませんでした。

次にセセナギ川があり、板橋なり、沼上村は厩岳の麓の山に半里余りとあります。左山際へは1里半もあります。皆田地なり。堂嶋川は板橋で長さが32間という。下へ流れて揚川という。越後新潟へ落ちる川です。源は猪苗代湖水なり。程無く大塩川あり、大塩川宿より落ちるといふ、共に揚川へ落ちる。午(うま・午前12時過ぎ)の時塩川着、塩川村の検断栗村平八宅に泊まりました。郡役所の物書き服部善内が麻裨で見舞いに来ました。その夜は大雨風でした。

7月1日は大雨で塩川村に逗留しました。7月2日塩川を6ツ後(午前6時)に出立し、下小出村、中ノ目村(塩川村)。倉で休み昼食を取り、高柳村、館村、関谷村(塩川村)、樟村(北塩原村)を通り八ツ(午後2時)前大塩村に着きました。宿は穴沢源吉と言ひ芦名一族の旧家です。谷合に沸井戸があり釜六、七ツで塩を作る家がありま

した。塩師の話では5釜に10石の水を入れると塩5斗が得られるといっています。

その塩は甚白く味は甘鹹です。塩は会津侯の御用達で売買はしておりません。この件について、北塩原村教育委員会村史編纂室に尋ねました。「本村の大塩温泉と思われず。温泉は現在5軒あり、塩分を含んでおり赤い色をしております。40度を越える温度です。今は大雪の中です。穴沢源吉の家は判りません。塩は戦時中まで取っていません」との回答をいただきました。伊能忠敬は房総九十九里の生まれです。海の塩と山の塩を比べ興味を持ち丹念に調べ、なめて味わったのでしょうか。大塩村での料理の味はいかなものだったのでしょうか。

7月3日伊能忠敬の測量隊は大塩村を出立し、大塩峠、蘭（あららぎ）峠を越えて、檜原村の間屋嘉兵衛宅に泊りました。ここは若松城下に漆碗生地を作っている家でした。「宿よし」の記述あります。

大塩峠、蘭峠は通行止めです。檜原村は明治21年の磐梯山大噴火により檜原湖が出来、湖の下に村が沈んでおります。

伊能測量隊は早稲沢、白布峠を越えて米沢、上山、新庄、秋田へと進みます。測量隊は1日平均12^{km}を徒歩で測量をしました。街道の距離は麻縄を使い正確に計りました。朝早く出発し宿泊地ではただちに観測機器を設定し夕食後星が出ると直ちに天体観測を始めました。天体観測は3754日の旅行中1840日にもなりました。夜遅くまでデータを整理し翌日の出発の準備にとりかかります。そのチームワークの良さに感心します。第10次測量まで日本国中を測量したそのエネルギーに感服致します。

平成に生きる我々は真面目に努力した先人の教えに学ぶ処が多いと思います。伊能忠敬日記よりいろいろな事が見えて来ます。東京都港区芝公園丸山に東京地学協会が「伊能忠敬測地遺功表」を建立しま

した。この度の調査で伊能忠敬記念館の紺野学芸員、多くの郷土史家の先生方のご協力をいただきました。感謝申し上げます。

今回の調査の中で江戸時代にあった村々の地名が福島県内に多く残っています。

(まつみや てるあき)

あさかの学園大学講師(化学専攻)陶芸家(日展作家)

★ ★ ★ ★ ★

松宮さんの陶芸「大地の芽」 日展で8回目の入選



作品のテーマは「生命誕生」。地上に生命を誕生させた自然の偉大な力を感じつつ、伸び行く生命の誕生を「大地の芽」と捉えて表現。叩きの技法を用い、釉薬は発色を抑え、落ち着いたダークブルーとスカイブルーのマット釉を使用している。大きさは横29^{cm}、幅29^{cm}、高さ78^{cm}と大型。おめでとうございました。

久美浜に於ける伊能測量(一)

松田 昭二

はじめに

伊能忠敬は50歳で家督を譲り江戸に出て、当時西洋天文学暦学の第一人者と言われていた高橋至時に師事し勉学の上、56歳より17年間にわたり全国の測量をなしとげ、正確な日本地図を作り上げた偉大な人物であると言うことはよく知られている。

全国を歩いた伊能忠敬は、勿論久美浜(現・京都府京丹後市)にも来ているに違いないが、あまり知られていないので、此の際久美浜町に於ける伊能測量の概要を調べてみたい。

伊能測量のあらまし

そこで先ず、久美浜測量までの伊能忠敬の測量の足跡を見ると、それは寛政12年(1800)4月より奥州街道から蝦夷地の第1次第2次測量から始まる。その後享和2年(1802)6月より奥羽、北陸、東海にかけての第3次第4次測量を完了して、東日本の地図を完成している。

この伊能図は緯度経度も入ったかつてない正確なもので、伊能忠敬の才能が認められ、幕臣の下役人に取り立てられた。従つて第5次測量からは伊能忠敬を隊長とする幕府直轄の事業となった。

久美浜にも来ている第5次測量は、文化2年(1805)2月忠敬61歳で江戸を出発している。御用旗を立て伊能勘解由(忠敬の号)隊長のもと天文方手付の下川辺政五郎、坂部貞兵衛、高橋善助の3人、測

量要員として弟子たち7人小者4人計15人の大測量隊であった。

今回の測量は東海、紀伊半島、近畿から山陽瀬戸内海沿岸を測り、赤間ヶ関を回り、山陰海岸を東に進み、敦賀で第4次測量の時の杭につなぎ、さらに琵琶湖を測り、東海道を経て文化3年11月江戸に帰っている。1年11ヶ月に及ぶ長旅であった。

5次測量に続き文化5年の第6次測量(淡路島、四国など)、文化6年の第7次測量(山陽、九州など)、文化8年の第8次測量(九州、中国近畿中部の内陸)、文化12年(1815)の第9次測量(伊豆半島から伊豆諸島)9次測量は老齢のため忠敬自身は不参加)と全国の測量を終えた。

文政4年(1821)『大日本沿海輿地全図』(伊能図)と『輿地実測録』を、忠敬の孫に当たる忠誨によつて江戸城大広間に広げ上呈された。それまで伏せられていた忠敬の死が公表され(忠敬は文政元年病没)忠敬の功績により、孫の忠誨は五人扶持と江戸屋敷が与えられ永代帯刀が許された。

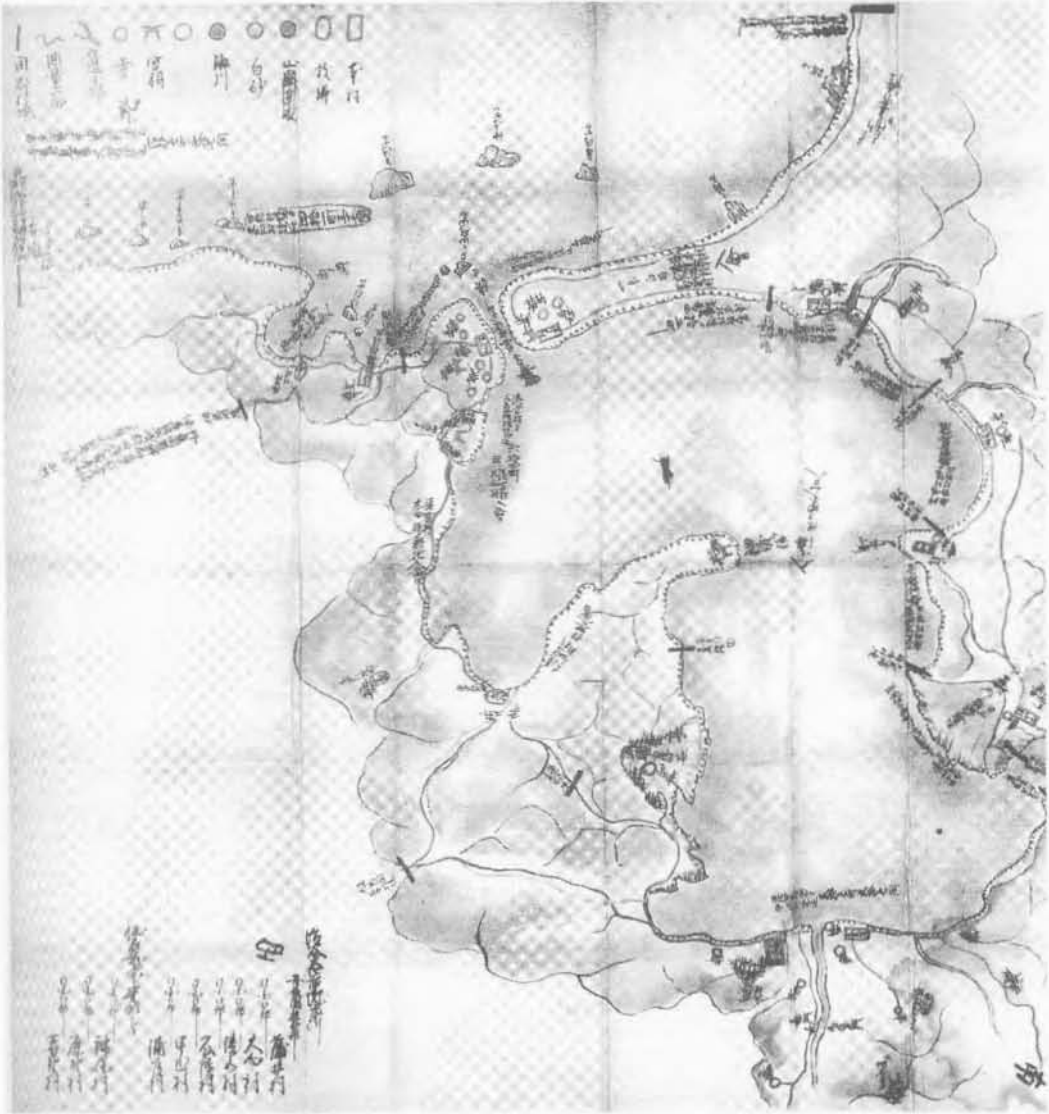
久美浜の海岸測量(文化3年の測量)

文化2年2月25日江戸を出発したのち、測量隊は近畿、山陽を済ませ下関を回つて山陰に入り、文化3年の夏から秋にかけて、出雲、因幡、但馬を測量し丹後に入っている。

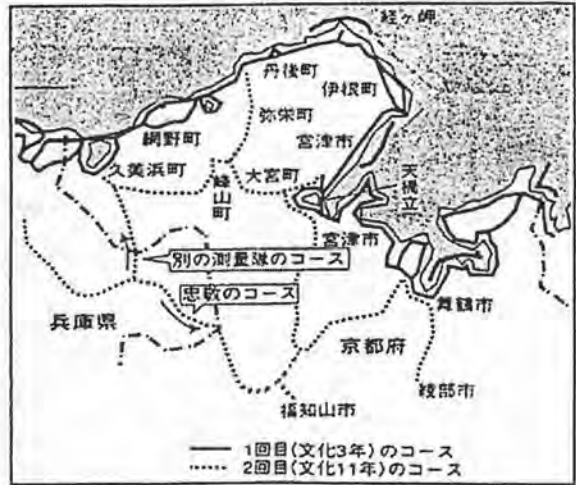
伊能忠敬の測量日記や、地元に残っている古文書を中心にして、久美浜での測量の様相を調べて見たいと思う。

但馬から丹後久美浜に入ったのは文化3年(1806)8月27日、太陽暦では10月8日にあたり、秋風のさわやかなよい季節であった。

伊能測量準備圖



伊能測量経路図（丹後関係部分）



8月27日 晴

六ツ後（6時頃）湯島村出立。忠敬は湊宮に直行、測量隊は三隊に別れて入っている。伊能忠敬は小者文助を連れて、飯谷村、畑上村、三原村（峠にて国境）を経て、丹後国熊野郡湊宮村枝郷河内に至り、乗船して湊宮村へ着く。

止宿は小西与右衛門（湊宮五軒屋の内）である。久美浜村の庄屋稲葉仁兵衛が伺いに出ている。（庄屋の一人山本甚左衛門は病氣にて出でず）

測量日記で特筆しなければならない次の文面がある。

『小西与右衛門ハ豪家ニ而、書画詩文ヲ好ミ、曾詩集ヲ著ス、松江近

体詩ニ曰性小西名積字伯照号松江吾邦名家ノ詩文ヲ多ク所有ス』と記している。

測量日記は測量に関する事の記録であり、此のような測量以外の事を書いたのは珍しい。忠敬も与右衛門と同じ庄屋（関東では名主）上がり隠居者、環境も似たところがある。よほど文人伯照（与右衛門）が気に入ったのであろう。

測量班の一番手坂部組は氣比の絹巻洲崎より田結村を通り丹後の蒲井村まで測る。二番手高橋組は蒲井より大向を経て河内にて終わる。三番手下河辺組は田結村中よりステガ岬まで測り、また蒲井村下より枝郷旭湊の内を測っている。

何れも七ツ（4時）頃に宿につく。

日記には通例の事で記載されていないが、早速その日の測量分を、図面におろす仕事が行われた筈である。

夕方塩谷大四郎（代官）手附真中治郎藏が見舞に上がっている。夜に至り宮津松平大隅守地方役田口武左衛門、出石仙石越前守代官宇野孫太夫が表敬訪問している。此の夜は晴天で天体測量がなされている。

輿地全図（伊能図）とともに幕府へ提出された、輿地実測録（国立公文書館保管）には、湊宮村35度38分と記されている。（秒までないが現在の地図と合致）

8月28日

朝六ツ（6時）頃小雨六ツ後止ム

一番手高橋、坂部組は河内から始め久美浜村（則御代官塩谷役所）にて二番と合流す。二番手下河辺組は、湊宮村湊口川尻より始め葛野村、鹿野村（2ヶ村は出石領）浦明村（御領）神崎村（出石領）を測って、久美浜村にて一番と合測。久美浜村で昼食のところへ、久美浜

代官所の手代渡辺園兵衛が出ている。両手とも七ツ後（4時）小西与右衛門宅へ寄宿している。

8月29日

朝六ツ前雨止ム。六ツ後湊宮村出立。

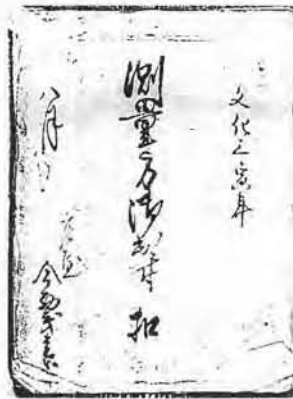
三手分け、一番手下河辺組は湊宮村川尻より始め浜詰村まで測り昼食、忠敬は同村より本道の上野村、岡田村を通り網野村へ直行。二番手坂部組は塩江より始め磯を通って浅茂川、小浜境までを測る。三番手高橋組は浅茂川村湖水回りを測る。

当日の宿は網野村の宮津領大庄屋 河田平八宅であり、その夜宮津藩の關係役人が表敬に訪れ、また久美浜側からも、代表として湊宮村年寄り喜左衛門、大向村庄屋五郎大夫、葛野村庄屋長五郎がお礼に来ている。

続いて丹後半島から宮津、田辺（舞鶴）と測り、9月18日には若狭へと測量を進めている。

地元の古文書からみた測量の様

（久美浜町 神谷太刀宮神社保管文書）



文化三寅年

測量方御出二付 扣 ひかえ

八月 庄屋

今西義兵衛

この文書は横半帳で下げ紐が付き、測量に関し携行した物と思うが、要点筆記であり70頁余りに亙っている。以下説明に必要と思う箇所を抜書するがお許し願いたい。

久美浜庄屋今西義兵衛は久美浜代官の郡中総代を兼ねているので、久美浜村以外も広い範囲わたり書き留めている。

右 御用御先触 測量方

覚

一、人足七人

一、馬六疋

一、長持一棹人足

右御文言御座候

御證文 丑二月采女様御印 （注 老中采女正 戸田氏教）

覚

伊能勘解由様（注 忠敬の号）

御弟子様御手代様方

（氏名省略）

御弟子七人

外二小者式人 内老人鍵持

高橋善助様

坂部貞平様

下川邊政五郎様

御三人

外小者三人

測量方の人員も小者も入れて14人の大部隊である。

地元からは馬7疋、長持1棹と必要な人足が要請されている。
 天体測量があるので中象限儀（恒星の高度を測る器具で回転半径115cmの四半円天体望遠鏡）など馬で運ぶ大掛かりの測量器具その他関係資材があつた事が想像できる。

次に測量隊に報告した「書き上げ」（村の概況調べ）があるので抜粋して記してみる。

書き上げ

久美浜村

一、高 千三百六拾式石四斗九升式合

一、御林 四町三反式畝式拾老歩

一、溜池 老ヶ所

一、御高礼場 長八尺 横五尺

切支丹 火付 徒堂五枚 博奕御座 強訴

一、村内土橋 三カ所

内老ヶ所 百姓自分普請

一、家数 参百貳拾八軒

一、寺 七ヶ寺

一、三十番邪堂庵 老軒御座候

一、氏神太刀宮大明神

一、人数 千五百式拾老人

一、名産 海松 穂蓼（蟹）

（その他詳細にわたり記してあるが省略する）

地元の測量協力態勢

人足割

一、三百人 当

半日ツツ 五拾人 附廻り

内三拾人下組 拾老人中下組 九人出石領

是御供附廻り人足蒲井村より浜詰地境迄

五拾人 木津山方九ヶ村

是ハ鹿野村境より浅茂川迄

残り式百五拾人

内式拾老人四ヶ組 四拾五人五ヶ組

七拾七人河上谷組 五拾五人八ヶ村

五拾五人六ヶ村 拾人四ヶ村 四拾老人出石領

右之の外湊宮村附村々は御廻村当日御用差支無之様

他参不仕村中人足差出可申候 以上

文化三年寅年二十一日 郡中

郡中代の庄屋今西義兵衛からの指示であるが、一週間前には、必要な人夫を海岸関係だけではなく郡全体を対象にして集める様に計画し、次の様に「人足差し出し人」を指名し周到な準備をしている。

人足差出人

永留村庄屋 半兵衛

三原村庄屋 幸右衛門

竹藤村庄屋 与平次

奥馬路村庄屋 嘉右衛門

御私領分

老分村庄屋 治左衛門

海士村庄屋 文八

次に測量関係諸道具の準備は次の通りである。

一、ぼんでん五拾本 是ハ蒲井村ニ用意仕置候事

(注 竹の先に御幣紙を付けたものでポールに相当するもの)

一、杭

一、のぼり 六七本用意之事

一、繩

一、駕籠拾挺用意仕候事

久美浜村え五挺遣

湊宮村え五挺遣

右揃合ニ仕候事 相对仕候

一、てんま三艘 湊用立有 此船待合仕候事

一、もうせん式まい むしろ

測量準備図の作成

海浜九ヶ村を一枚に集めた絵図を作り、前々日迄に測量隊が泊まる宿まで持参しなければならなかった。(同じような図面が伊根町にも残っている)ので、予めひな型が示され準備図を作るよう指示されていたと考えられる)

九ヶ村一所之繪(図)面也

一、引附繪図面前々宿え持参仕候人

同断

一、繪図仕候組合九ヶ村

蒲井 大向 湊宮 久美浜 甲山 神崎

浦明 鹿野 葛野

右之繪図面前宿え差上候而

村方ニは口案内

夜九ヶ村共下繪図久美浜へ持参し、久美浜ニ而本繪図相したためるこの『九ヶ村一ヶ所繪図面』も「神谷神社保管文書」の中から発見することができた。

81 cmに85 cmの大ききで表題はない、左下に

塩谷大四郎御代官所(注、塩谷代官は文化年間在任)

丹後国熊野郡 蒲井村

同国 同郡 大向村

同国 同郡 湊宮村

同国 同郡 久美浜村

同国 同郡 甲山村

同国 同郡 浦明村

仙石越前守領分

同国 同郡 神崎村

同国 同郡 鹿野村

同国 同郡 葛野村

と関係村が記されており、測量筋など測量関係事項が記入された立派な図面である。

以上事前の準備を整えた。8月24日には忠敬が湯嶋泊まりであるので、ご機嫌伺いに塩谷大四郎代官所関係では久美浜村庄屋今西義兵衛が、出石仙石越前分関係では熊野郡三分村大庄屋西垣又左衛門の、兩人が伺いに出て、「両名札ニ而差出ス」と記されている。

又同日、先触で既に承知している、蒲井村など『九ヶ村一所之繪図』を、大向村庄屋五郎太夫、甲山村庄屋善兵衛、出石領では葛野庄屋長五郎の三人で持参差し出している。

提出したこの『九ヶ村一所之繪図』により久美浜の測量計画が定められたであろう。説明している時の話であったのか、高橋様御

内惣兵衛様へ「縮緬三四疋極上々之品御覧ニ入候事 湊泊候節遣可申事」「右ちりめん無御座御断申候」と約束したが出来ず、恥をかけたエピソードも残っている。

当日の測量の様様

8月26日は、雨のため久美浜に入るのが一日延びた。

そのことは今西義兵衛には分からない。「三原村迄義兵衛 出向拾人召連参候所御延引相成候」と仕方なく引き返している。

8月27日 人足拾貳人 八月廿七日右御出ニ付吉左衛門湊え参り
召連参り申候

湯嶋御出立ニ而御通行覚

8月27日

伊能様 御四人

久美浜通り河内通り 湊宮村御昼御泊り

壱ばん 坂部様 御四人

絹巻より田結峠越 蒲井村え御出 則田結昼

二ばん 高橋様 御四人

蒲井村より河内迄御越 則大向村御昼ニ御座候

三ばん 下河部様 御四人

田結村井戸より海辺通り 旭湊御改 則蒲井村御昼

右之通今日無滞相済申候

8月28日（西方 東方に分かれ測量するが経路省略する）

西方

一、高橋様（高橋至時の弟） 坂部様

東方

一、平山様 稲生様（伊能忠敬の庶子）
一、佐藤様 御家来 吉平 惣平
右御方久美浜 御昼ニ御座候

一、下河部政五郎様 尾形顯次郎様
一、門倉隼太様 小坂寛平様
御家来 栄治

右御方様御昼は神崎村ニテ御座候

右御二手共 当九ヶ村一同御測量相済申候

8月28日御改之義ニ付心覚

一、ぼんてん 廿本

但一本ニかみ 三まいづつ いい付ル

一、ぼんてんぐい 式拾本用意

一、人足 拾五人 河内ニ夜之内ニ参候事

かま（鎌）三まい用意持参ル

一、のぼりざを 五本 持参事

一、のぼり拾五本 四尺 三尺ニ而もよし

外 かけや なわ わらじ ぞうり

一、船式艘 用意仕 湊え参る事

是ハ久美浜役人御測量ニ付 式手ニ付案内

式艘 壱艘西 壱艘東ニわかれ案内仕候事

一、人足四人 右案内水人足

一、中紙一状用意

一、札紙五十枚用意

一、船式艘 道具早々つみ候船也

西東二出ス事 村より出シ候道具也

一、人足四人 右道具つみ船人足

一、吉左衛門 御村内そうじ心付ル事

麴屋ノてんとうかりる事

一、船老艘用意

御ちや用意仕事

七りん ちゃ たばこぼん まくり もうせん

ちゃだい ちゃわん 上十 同中十

右役 武兵衛 甚十郎

一、右船人 足四人

一、御先触写持参仕候

当日測量の案内

(註 残念ながら『先触写』
そのものは見付からない)

東御案内

庄屋 今西義兵衛

年寄 磯右衛門

ゞ式人

外 甲山庄屋 善兵衛

浦明庄屋 駒沢忠右衛門

神崎庄屋

葛野庄屋

仙石越前守様御領分

三分大庄屋 西垣又左衛門

右御二手二付 御道具二沢ニ御渡被成 銘々請取置

人足え相渡 又相改返上仕候

8月29日は久美浜を終了し、3組に分かれ網野に向かって出立で

ある。

御長持其外 荷物差添のもの二人 これは湊宮村より直に泊に参

り申し候

右御役人様 湊当二十九日朝六つ時御出立二而無滞相濟申候以上

お泊り迄付き添い人

九ヶ村惣代 大向庄屋 五郎太夫

葛野庄屋

湊宮村

以上が『測量方御出二付 扣』の抜書である。今西義兵衛は早くから各庄屋に対する連絡や依頼、九ヶ村寄絵図面の作成、測量当日の材料準備、人足並び案内人の調達、忠敬に対する表敬や接待に関する心づかいなど、かつて経験しない大仕事であったと考えられる。

『無滞相濟申候』には義兵衛でなければ解らない特別の感慨が含まれていると思う。宿泊については小西与右衛門宅であったので、この古文書には出て来ないが2日間14人の宿泊接待も大変であったであろう。(つづく)

(まつだしょうじ・久美浜町郷土研究会副会長)

編集余話 昨年の四冊に続いて本号も72頁になりました。いつも暖かいご支援に御礼です。思いがけず新進作家の能美龍一郎さんからご寄稿を頂きました。河崎さんの伊能忠敬に対する情熱が通じたようので皆様同様にうれしい思いです。「海上保安庁の大図に新しい発見」の話題、伊能ご夫妻の叙勲など次号になります。永年のご縁に深謝まで。

訂正II前号34頁「亜欧堂田善」、一七九五年の測量開始は一八〇〇年に、

「松平定信が高橋至時に命じた」は時期が不一致で削除します。(F)

伊能測量隊の経度の測定(二)

佐久間 達夫

協力者 嘉数次人

二 経度の測定法(続)

4 地図上の長さから経度の算出

伊能忠敬は、実測資料を基にして作成した大図(下絵図)から、地図上の長さを求めて経度を算出している。

資料五 文化五年四国大和地測量・文化七年九州之一部測量

東西南北距離記、諸国測量地図北極高度並東西度

伊能忠敬記念館蔵

(1) 文化五年四国大和地測量・文化七年九州之一部測量

東西南北距離記

● 東都深川黒江町

南 一丈〇三寸七分一厘
極差 一度〇一分一七秒

・播磨国明石郡大蔵谷

南 五寸五分七厘
東 一寸一分七厘
南 一丈〇九寸二分八厘
極差 一度〇四分三五秒
実測平均 一度〇四分三五秒

・淡路国津名郡岩屋浦

● 東都深川黒江町
南 一丈九分一厘
西 三丈五尺七寸四分九厘九毛

・摂津国大坂 長堀富田屋町

極差 五九分三八秒
南 六分五厘
東 六寸〇一厘

・摂津国東成郡深江町

南 一丈〇一寸五分六厘
極差 一度〇〇分〇一秒
実測差 〇度五九分五四秒

● 東都深川黒江町

南 九尺八寸七分三厘六毛
極差 〇度五八分二一秒
実測差 平均五八分三〇秒

・遠江国浜松 旅籠町

北 一尺〇五分六厘五毛
西 六寸三分三厘五毛
南 八尺八寸一分六厘
極差 五二分〇六秒

・遠江国引佐郡気賀町

南 一丈七尺四寸二分七厘六毛
極差 一度四三分
南部町 三三度五七分三〇秒

・長門国豊浦郡赤間関

南 六寸七分九厘
西 五寸五分〇厘
南 一丈八尺一寸〇分六厘六毛
極差 一度四七分

・豊前国企救郡小倉 船頭町 三三度五三分三〇秒

●薩摩国鹿児島郡鹿児島 上町車町

自赤間関至鹿児島

南 二丈三尺九寸五分四厘

西 三尺九寸三分〇厘五毛

赤間関 北極高度 三三度五七分

余弦 〇八二九五三

此の東西一度の寸八尺四寸二分一厘

以除、西三尺九寸三分得る

赤間関と鹿児島 平均北極高 三二度半

此の東西比例 八尺五寸六分二厘

自赤間関至鹿児島

西 〇度二八分〇〇秒

〇度二七分三三秒

自京師至鹿児島

南 三度二四分半

西 五度二一分半

南 八寸六分一厘

西 三寸八分九厘五毛

南 四丈二尺二寸四分二厘五毛

極差 四度九分四〇秒(四度三七秒を訂正する)

・薩摩国谿山郡福本村浦町

○ 長門国赤間関と薩摩国鹿児島の経度差の求め方

地図上の赤間関と鹿児島の南北長さ(大図・一里が三寸六分)

二丈三尺九寸五分四厘

地図上の赤間関と鹿児島の東西の長さ

赤間関の北極高度(緯度)

三尺九寸三分〇厘五毛
三三度五七分

赤間関と鹿児島の緯度差

(余弦〇、八二九五三)
二度二一分三四秒

※ 求め方

赤間関と鹿児島間の南北距離をXとすると、大図では、一里が三寸六分だから、

一里対〇、三六尺 \parallel X里対二三、九五四尺

〇、三六X \parallel 二三、九五四 \times 一

X \parallel 二三、九五四 \div 〇、三六

X \parallel 六六、五三八八里

これを緯度差に換算すると、緯度一度は二八、二里だから緯度差Yは、

Y \parallel 六六、五三八八 \div 二八、二

\parallel 二、三五九五三五となる。

度の下 六〇分 \times 〇、三五九五 \parallel 二一、五七分

六〇秒 \times 〇、五七 \parallel 三四、二〇秒

二度十二一分十三四秒 \parallel 二度二一分三四秒

鹿児島の北極高度 三一度三五分二六秒

※ 求め方

赤間関の北極高度 \parallel 赤間関と鹿児島の北極高度差

三三度五七分 \parallel 二度二一分三四秒 \parallel 三一度三五度二六秒

赤間関と鹿児島の平均北極高(緯度) 三二度三〇分

東西比例 八尺五寸六分二厘

● 赤間関と鹿児島の経度差 二七分

※ 求め方

赤間関と鹿兒島の東西の長さ÷経線一度の間隔∥経度差
三・九三〇五尺÷八・五六二尺∥〇・四五九〇六三三度

∥二七分

・忠敬は、任意の二点間の東西分X a mを、その平均緯度一φに相当する経線一度の間隔Dコサイン一φで除して、これを経度差とするという近似法をとった。これはX a mを一φ緯線上の距離と考えるものであり、地図上の経線の引き方とは一致しない方法である。従つて忠敬は、経線というものは、常に誤差がともなうものだと感を得て深くしたことであろう。『伊能忠敬の科学的業績』広瀬秀雄記)

注釈 X a mは、赤間関と鹿兒島の東西分

一φは、平均緯度推定値 Dは、縮尺度法

(2) 「文化五年四国大和路測量・文化七年九州之一部測量東西南北距離記」に記述されている測量地の数

播磨国	一箇所	淡路国	一三箇所
阿波国	一二箇所	土佐国	二九箇所
伊予国	五三箇所	讃岐国	二八箇所
摂津国	二箇所	河内国	一箇所
大和国	一一箇所	伊賀国	一箇所
伊勢国	二箇所	遠江国	三箇所
豊前国	一六箇所	豊後国	四一箇所
三河国	三箇所	日向国	一五箇所
大隅国	一七箇所	薩摩国	三四箇所
肥後国	五二箇所	長門国	一箇所
計		三三五箇所	

(3) 「諸国測量地図北極高度並東西度」に記述されている測量地の数

遠江国	三箇所	三河国	三箇所
播磨国	一箇所	淡路国	一二箇所
阿波国	二四箇所	土佐国	五八箇所
伊予国	一〇六箇所	讃岐国	五八箇所
摂津国	二箇所	河内国	一箇所
大和国	一一箇所	伊勢国	一箇所
伊賀国	二箇所		
計	二八二箇所	但し、「文化五年四国大和路測量・文化七年九州之一部測量東西南北距離記」と重複がある。	

資料六 一里六分図東西之経度並自北極下国直円経差

(1) 一里六分図東西経度 即斜円経並自北極下国直円経差
・北極出地三五度以京都為中度

以京都為中度	一里六分図東西経度	自北極下国直円経差
〇度一〇分	二寸三一	一毛九二二
二〇分	四寸六二	七毛六九四
三〇分	六寸九三	一厘七毛三四〇
四〇分	九寸二四	三厘〇毛八六二
五〇分	一尺一寸五五	四厘八毛一六一
一度 〇分	一尺三寸八六	六厘九毛三八七
一〇分	一尺六寸一七	九厘四毛四六二
二〇分	一尺八寸四八	一分二厘三毛三四八
三〇分	二尺〇寸八九	一分五厘六毛一〇五
四〇分	二尺三寸一〇	一分九厘二毛七一〇
五〇分	二尺五寸四一	二分三厘三毛一六六
二度	二尺七寸七二	二分七厘七毛五二七

三度	四尺一寸五八	六分二厘四毛五一九
四度	五尺五寸四四	一寸一分一厘〇毛四三八
五度	六尺九寸三〇	一寸七分三厘五毛四二五
六度	八尺三寸一六	二寸四分九厘九毛七三七
七度	九尺七寸〇二	三寸四分〇厘三毛四六五
八度	一丈一尺〇寸八八	四寸四分四厘七毛〇二七

北極出地三六度 東西経度 円経差

〇度一〇分 二寸二八、一四二八 一毛九〇二

北極出地三七度 東西経度 円経差

〇度一〇分 二寸二五、二二五二 一毛九五六

北極出地三八度 東西経度 円経差

〇度一〇分 二寸二二、二二九〇 一毛九七四七

北極出地三九度 東西経度 円経差

〇度一〇分 二寸一九、一五五二 一毛九九〇八

北極出地四〇度 東西経度 円経差

〇度一〇分 二寸一六、〇二四五 二毛〇〇四

※ 以下四四度まで記述

・東西経度即極度円経 一里六分四

三四度一〇分	二寸三三、七八八六	一毛八八七
三三度一〇分	二寸三六、五〇五一	一毛八五九
三二度一〇分	二寸三九、一四九六	一毛八二九
三一度一〇分	二寸四一、七二二二	一毛七九七
三〇度一〇分	二寸四四、二一九二	一毛七六二
二九度一〇分	二寸四六、六四二八	一毛七二六

(2) 六分一里四東西之寸法

北極度毎度二八里二分 一尺六寸九分二厘

※ 二八里二分×六分(中図) || 一六九、二二分

(一尺六寸九分二厘)

緯度 毎度里程寸法不同

例 北極度二九度

二四里六六四二七〇×六分 || 一四七、九八五六二分

(一尺四寸七分九厘八五六)

北極度 東西一度の里程 寸法(中図上の長さ)

二九度	二四里六六四二七〇	一尺四寸七分九厘八五六
三〇度	二四里四二一九一六	一尺四寸六分五厘三一五
三一度	二四里一五二一四六	一尺四寸五分〇厘三二七
三二度	二三里九一四九五六	一尺四寸三分四厘八九七
三三度	二三里六五〇五一	一尺四寸一分九厘〇三一
三四度	二三里三七八八六	一尺四寸〇分二厘七三二
三五度	二三里一〇〇〇八六	一尺三寸八分六厘〇〇五
三六度	二二里八一四二八	一尺三寸六分八厘八五七
三七度	二二里五二一五	一尺三寸五分一厘二九一
三八度	二二里二二一七	一尺三寸三分三厘三一四
三九度	二二里九一五五	一尺三寸一分四厘九五
四〇度	二二里六〇二四五	一尺二寸九分六厘一四七
四一度	二二里二八二八一	一尺二寸七分六厘九六九
四二度	二〇里九五六六八	一尺二寸五分七厘四〇一
四三度	二〇里六二四二	一尺二寸三分七厘四五
四四度		一尺二寸一分七厘九〇六
四五度		一尺一寸九分六厘三九二六
四六度		一尺一寸七分五厘三三二七

※ 原本は、十分毎に記述してある。

(3) 求北極度東西之円線 算例

北極出地三五度 而求東西一度 円経三五度は、北極下地より五五度なり。

一 率 赤道下一度 余弦 \circ 九九九八四七七

(コサイン一度 \parallel \circ 九九九八四七七)

二 率 半径

三 率 北極下地より五五度 正切 一四二八一四八 \circ

(タンジェント五五度 \parallel 一四二八一四八 \circ)

四 率 正切 一四二八三六五五四

正接 一四二八三六五五四は、五五度 \circ 一分一四秒七六

探表得

※ 求め方

一 率 対 二率 \parallel 三率 対 四率

一度の余弦 対 半径 五五度の正接 対 X

\circ 九九九八四七七 対 \parallel 一四二八一四八 \circ 対X

\circ 九九九八四七七 \times X \parallel 一 \times 一四二八一四八 \circ

X \parallel 一四二八一四八 \circ \div \circ 九九九八四七七

X \parallel 一四二八三六五五

三角関数表のタンジェント表から、一四二八三六五五に相当する角度を求めると、五五度 \circ 一分一四秒七六となる。

一度は、二八里二分

五五度は、二八里二分 \times 五五 \parallel 一五五一里

五五度 \circ 一分一四秒七六は、一五五一里 \parallel 一五六二となる。

里下 一五六二は、 \circ 一五六二里 \times 三六町 \parallel

\parallel 四、一六二町

四町一六二は、三六町対六分 \parallel 四町一六二対X分

\parallel 三六X \parallel 六 \times 四、一六二

X \parallel 二四、九七二 \div 三六

X \parallel \circ 、六九三六六(分)六厘九三七

一里が六分の図(中図)では、六厘九三七となる。

注釈 一四秒七六は、一度が三六 \circ 秒

三六 \circ 秒対二八里二分 \parallel 一四、七六秒対X里

三六 \circ 秒 \parallel 二八、二 \times 一四、七六

X \parallel 四一六、二二三 \div 三六 \circ

X \parallel \circ 、一一五六二(\circ 、一一五六二里)

(4) 求北極度東西之円線 算例

北極出地三五度 而求東西一度円経(三五度は、北極下地より五五度なり) ※コサイン三五度 \parallel \circ 、八一九一五二 \circ

中図上での緯度三五度における経度一度の長さを求めると、中図上では、一里は六分になるから、

中図上での経度一度の長さ \parallel 二八、二里 \times 六分 \times コサイン緯度 \times

東西一度(経度)

・中図上の長さ

二八、二 \times 六 \times \circ 、八一九一五二 \circ \times 一

\parallel 一三八、六 \circ 〇五一(分)

(一尺三寸八分六厘 \circ 〇五一)

・緯度三五度での東西一度の里程

二八、二 \times \circ 、八一九一五二 \circ \times 一

\parallel 二三、一 \circ 〇〇八六里

(三三三三 \circ 〇〇八六)

・求同二度円経差

一 率 赤道下一度 余弦 \circ 九九九三九 \circ 八

二 率 半径

三 率 北極下地より五五度 正切 一四二八一四八 \circ

四 率 正切 一四二九〇一八五六

検表得 五五度〇〇分五九秒〇四七七

一度は、二八里二分、従つて五五度五九秒〇四七七は、一五五一里四六二五四となる。

里の下四六二五四は、一六町六五一四四。一六町六五一は、六分一里図の二分七七五。

資料七 日本実測録

大日本沿海実測全図凡例

南北一度、定為二十八里二分、施之于大図上、当一丈一寸五分二厘、中図六分之、小図十二分之、至東西経度、則以京師、定為中度、東西敷起、而其度隨居地而不同、如北極出地三十五度、則東西一度為二十三里一分、四十度地、二十一里六分、四十四度地、二十里二分八厘五毛、施之于大図上、三五度地、一度当八尺三寸一分六厘、四十度地、七尺七寸七分七厘、四十四度地、七尺三寸三厘、中小図二図各約分得之、今逐度逐分算而畫之、從南距北漸成并線、而各地方位度數皆自此線生、実為緊要、但大図距度広寛裁而分幅、故経緯度線皆難以施、亦特載諸中小二図

これまで伊能忠敬が、経度の決定をするための天体の観測資料について記述した。

二地点以上で時刻を合わせるために、天体の食現象（日食、月食、木星衛星）が利用された。月食と木星衛星の食は、同時性が得られるが、日食は二箇所同一現象が同時に見られない。そこで暦推算の補正をして一応同時性が得られるとしていた。

次に伊能測量隊が、天体の食現象を観測した箇所を記してみたい。

○ 日食観測

能代湊（現秋田県能代市）

塩飽本島泊浦（現香川県丸亀市）

鳩浦（現大分県津久井市）

大賀郷（現東京都八丈町）

○ 月食観測

鳥崎村（現福島県南相馬市）

錦浦（現三重県大紀町）

大浜浦（現香川県三豊市）

松井田宿（現群馬県安中市）

小倉城下（現福岡県北九州市）

賤津浦（現長崎県佐世保市）

下田町（現静岡県下田市）

○ 木星並びに木星衛星食

山田町（現三重県伊勢市）

島羽（現三重県鳥羽市）

岡山（現岡山県岡山市）

浜田（現島根県浜田市）

福光本領（現島根県大田市）

知夫里（現島根県知夫村）

小郡駅（現山口県山口市）

八尾村（現福岡県豊前市）

鹿兒島（現鹿兒島県鹿兒島市）

山川津（現鹿兒島県指宿市）

秋目村・片浦村（現鹿兒島県南さつま市）

里村・伊牟田村（現鹿兒島県薩摩川内市）

松橋村（現熊本県宇城市）

高瀬町（現熊本県玉名市）

江迎村（長崎県江迎町）

武生水村（現長崎県杵岐市）

鴨居瀬村・舟志村（現長崎県対馬市）

しかし、これらの資料は、天気などに左右され、一部を除いては、良好な観測値を得ることができなかった。

また、各測量地点間の地図上での長さからの経度の算出に当たって伊能忠敬は『ラランデ暦書管見』の記述内容が知識としてあったためか、地図作成には苦慮したようである。 完

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）

忠敬談話室だより

縁は異なるもの 首藤 郁夫

志筑忠雄没後二百年記念シンポジウムに参加するため、六年ぶりに長崎へ参りました。

十一月十八日の懇親会には、科学史学会の佐藤賢一さん、伊藤節子さんと出席しました。

その折、初対面の松山大学教授村上嘉一さんから「地図に興味のある素人ですが、『伊能図』に郷里の古い村名が出ていて嬉しかった」と伺いました。帰宅して、会報「伊能忠敬研究」裏表紙裏掲載の研究會案内の写しを送りました。お礼のメールが事務局にとどき、福田さんから村上さんへ着信とお礼の返信、そして小生へ村上さんのメールと処理につき丁寧なご案内をいただき、恐縮しました。

この懇親会ではもう一人、東京農大の榎本・横井研究会の榎本静恵さんと、榎本武揚の話が出ました。伊能研究会伊藤栄子さんの会報連載の労作論文「榎本武揚」を紹介して、写しを後日送りました。間もなくお礼の電話があり、十一月三十日幕末史研究会で、榎本武揚の曾孫、榎本隆充氏が講演されると誘われました。

当日受付の永田氏は洋学史研究会での顔見知りでした。伊能陽子さん、伊藤栄子さんも出席されたので、榎本さんを紹介出来ました。西川先生、福田さんにもお目にかかれました。

小さな触れ合いが、楽しいつながらりとひらいて行くのを実感しました。

(すとう) いくお・科学史学会役員
志筑忠雄 1760~1806 蘭学者。長

崎生れ。「曆象新書」など天文物理書の訳、「和蘭詞品孝」などの文法研究、ケンペル「日本誌」の抄訳「鎖国論」など著訳多数。馬場佐十郎は門人。「岩波日本史辞典」本姓中野、号は柳圃として知られる。

・日本科学史学会、科学史学校、洋学史研究会、鉄砲史学会などの情報は周藤さんまでどうぞ

九州文化図録撰書第5号「唐津街道」発行



博多の「のぶ工房」はご夫婦ふたりの出版社で、グラフィカルな地域本の創造を目指しています。今度の新刊は唐津街道。その歴史

を地図、写真、古文書など新旧多彩な史料から豊前筑前福岡路を美しく描く。

「海の中道の撮影からはじめた。西に向って

振り返らず歩くと二十六聖人の旅を追体験できる。福岡から唐津にかけて街道は海に沿って進む。県境近く、二丈町姉子浜に車を止めてひと休み、海の色が濃い。まさに玄海。砂が乾いていけば、ここの浜は鳴くのだ。つまり海水がとても綺麗だということ。風がそれほど強くなくても、冬は海が荒れる」

…遠藤順子

「唐津街道のルートの問題点を河島悦子氏に一通り習って：発刊の準備は順調に進んでいた。そんな時期に伊能大図と出会い、文政期と明治の地籍図にいくつかの相違があった。確認のため全ルートを踏破して撮影のやり直しを行うことになった結果、発刊まで、さらに二年の時間を要した。河島さんの『唐津街道』と合わせて読んでいただけたら幸いです」

…遠藤 薫

「奥村玉蘭の『筑前名所図会』は見るタイムマシンだ。私は歴史と交信できる場所を見つけ、出向いてみる。古い神社や寺ばかりではない。アスファルト舗装の路地に、橋のたもとに、小さな湧き水に、波間に浮かぶ小島に。遠い昔に生きていた人たちに思いをはせ、話しかけてみる場所をみつけることができるのである」

…遠藤順子

図書出版のぶ工房

☎092・531・6353 ￥2625

すばらしい出来栄です。是非お手元に！
新聞書評など話題拡大を期待しています。

■今年の地磁気偏角解析研究 辻本 元博

小生は伊能忠敬の測量台帳「山島方位記」(重文67分冊)記載の磁針方位角データによる当時の日本全国の地磁気偏角解析研究の為に日本学術振興会から昨年度の科学研究費助成を受け研究を続けております。伊能が測量をした多数の測量基点の中で詳細位置の特定可能な場所を探し出し現地での緯度経度を測定中です。一人では北海道の道東から東北、北陸へ出向き同時に近畿、山陰と一路南下中で、これまで到底解析は無理と言われた伊能測量当時の日本の地磁気偏角の概要を算出しつつあります。不案内且つ初対面の小生に手を指し伸べて助けて下さった各専門分野の諸先生方、郷土史の先生方、地元関係者の皆様方、同好有志の方々への熱意溢れる手厚く暖かいご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

本年は京都大学地磁気世界資料解析センターニュース(インターネット)で北日本の解析結果を発表の予定です。

編集部 その後、以下で発表になりました。

<http://swdcwww.kugi.kyoto-u.ac.jp/wdc/news/0701.html>

以前の記事 以下/0501.html

■数学するヒトヒト 藤田宏さん

【朝日新聞 06・12・14】

東大名譽教授、藤田宏(78)も、黒木にくどかれて創刊号から執筆した数学者の一人である。そして、藤田は、もう一つの「大学へ

の数学」を書いた。

終戦の2カ月前、爆撃で眼前の父を失った藤田は、東大理学部物理学科へ進んでもアルバイトで自活する苦学生だった。当時、大学の教室を借りて日曜日に中高生を教える「東大文化指導会」が学生活動として認められていた。藤田はそれに参加し、52年、同じ学科の中田義元、根岸世雄と作ったのが受験参考書「東大への解析1、2」だった。現在も発行されている参考書「大学への数学」シリーズ(研文書院)の前身である。



新制高校が発足、新時代の参考書が求められていた。教科書からはみ出た大学レベルの数学も載せる「エリート向き」という方針が歓迎され、大いに売れた。「新しい時代の学生の意気込みがマッチしたんでしょね」と藤

田。(敬称略・紙面より)

編集部：藤田先生も奥様もわが研究会会員です。

日々の話題

■月刊コレジオ 「地方史情報」に情報発信

明暦江戸大絵図：幻の黎明期江戸に架橋する最大情報量の手描彩色大図を高精細カラー印刷で完全公開。

連載中 清水靖夫さん：古地図つれづれ草

鈴木順子さん：地図史の窓

☎042・328・1503 芳賀さん

■地図の夢に挑み創る：武揚堂110周年

II 愛と智と力でII



■世田谷伊能家と榎本家が縁戚！

榎本隆充氏「歴史の証人・書簡

― 手紙でたどる榎本円兵衛の生涯―

主催 幕末史研究会 06・11・30

講師 榎本隆充氏は武揚の曾孫

内容 榎本武揚の父円兵衛(箱田良助)が江戸時代後期から幕末にかけて、伊能忠敬の内弟子として「大日本沿海輿地全図」作成に貢

献した前半生と、幕府官僚として活躍した後半生を八通の手紙から考察した。

伊能洋、陽子さんの祖父は伊地知季珍さん。季珍さんの奥様の鑑(かん)さんは祖母にあたる。本日の講演で隆充氏は武揚の妻多津さんの妹が鑑さんだとお話があった。ここに伊能・榎本家の係わりが明らかされた。

■ネット時代の「伊能忠敬」住宅地図のゼンリン

「朝日新聞 07・1・18」



伊能忠敬のように、全国を実際に歩いて地図のエリアを広げていったゼンリン。災害予測、歩行者ナビなど電子化に住宅地図の用途が広がる。情報は今も忠敬さん同様に足で収集しているという。但し現在ではこれらの情報利用には高い倫理観が求められている。

お知らせ

■武蔵大学講座「知と実践の融合」

第49回 公開講座「市民メディアは社会つ

なぐ」インターネットによる日常生活の現場からの情報発信 2・24〜3・10
第11回 イブニングスクール「東アジアの中の日本」―文化交流の視点を通して考える 3・2〜3・30
問い合わせ 武蔵大学企画・広報課
☎03・5984・3713

■ニッポンを歩こう・今年のウォーク情報

- ・1月25日〜28日 第5回忠敬江戸入りウォーク 佐原〜成田〜手賀沼〜市川
- ・1月28日 第6回伊能忠敬銅像ウォーク 東京深川富岡八幡宮
- ・4月1日〜5月16日 21世紀の朝鮮通信使・日韓友情ウォーク ソウル〜東京
- ・5月19日〜28日 第7回伊能番外ウォーク 古代東山道千キロ近江国から陸奥出羽国
- ・パート1 比叡山〜長野県阿智村
- ・パート2 10月20日〜28日
- ・パート3 08年5月17日〜25日
- ・パート4 08年10月21日〜26日
- 大会会長 大内惣之丞JWA副会長
- ・6月3日 全日本歩測大会 in つくば
- * 第二次伊能ウォークについて 会報44号でのご案内の「伊能図ウォーク」は2010年に開催が予定されていますが、詳細決定までにはまだ時間がかかります。決定次第ご連絡いたします。

■日本数学史学会で講演

07・1・28 東京書籍本社ホール
第92回数学史講座

伊能忠敬との七十年―古来稀なる春を―
史料の保存と整理 伊能 陽子
伊能忠敬異聞 安藤由紀子
渡辺慎(尾形謙二郎)のこと

わが会員で綾部市の平岡佳子さんが出席。前日は塩竈神社で算額探訪。お元氣でした。

■伊能大図フロア展

3月1日〜4日 日本全国版
高知市東部総合運動場内競技場

主催 高知県歴史民俗資料館

(開館15周年記念特別企画展)

高知県文化財団

■春の佐原周辺イベントから 開催日要確認

- ・郷土芸能「佐原囃子」特別披露
- ・日本三大厄除大師「観福寺」

国指定文化財特別公開

・「佐原工芸」と酒仕込み体験

・横芝光町 坂田城址梅まつり

■新入会員です。どうぞよろしく。

平野 幸彦さん 札幌市中央区
北海道庁OB、千葉県出身。「佐原の忠敬

生家には小学校5年と社会人になってから訪問しました。昨年道庁を退職後、調査分析、企画設計等の新会社を立ち上げております」

■会報合本No.4発刊 39号から46号収録

会員頒布四千円 申込は事務局まで
■今年の行事予定・速報 別紙広報版へ参照

伊能忠敬研究会御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

―予定―

第48号締切3月末 発行5月

第49号締切6月末 発行8月

第50号締切9月末 発行11月

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

- 三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

④ (04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax 03-3466-9752

事務局メール fuku-inh@gj9.sou-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にて任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。

話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページは秋葉武晃さんの担当です。

<http://inh-tadataka.org/>

速報充実 鹿鳴館のぎわいに

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など御覧いただけます。 大図画像が再開

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書齋、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

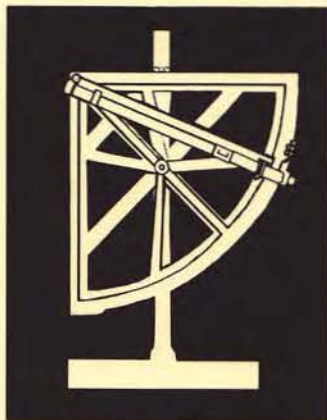
編集後記

初日を武蔵の高麗丘陵で望みました。右手に富士山、左奥はうつすら筑波山。広重「名所江戸百景」118景には富士が19、筑波は11描かれているそうです。東洋文庫蔵享和三年(一八〇三)鍬形紹真作江戸名所之絵は本所上空からの鳥瞰図。深川から浅草暦局への町並みや富士山が美しく描かれています。忠敬さんが見た市中央からの眺望に重なります◇日本の月探査機「セレーネ」は今夏打ち上げ。天文現象では三月に皆既月食に部分日食。八月皆既月食、十二月ふたご座流星群。中国も月探査機、米国は小惑星探査機を。宇宙飛行士土井さんが搭乗して日本の実験棟「きぼう」打ち上げも。高橋至時を描いた小説鳴海風著「ラランダの星」から天空の話題◇江戸しぐさの越川さん。しぐさは思草。育ちも習慣も違う人たちがひしめく江戸で衝突を避け、いじめやいざが起きないように知恵や方策をきめ細かいしぐさに。自分だけでなく皆で気持ちよく暮らそうとした熱意のようなものを感じると◇草苔堂武田文庫の渡辺敏夫著「間重富とその一家」に(遠山に見し白雲も今朝はたゞ霞がくれて春にそちらん)重富◇自然暦は雪形で春を(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.47 2007



Tadataka's First Writing of the New Year : "A New Spring TOPICS	Unknown in the Past"	1
Place Names and Landscapes in " <i>Inoh Daizu Soran</i> "	Hoshino Yoshihisa	2
A Copy of Large-Scale Inoh Map of Sado has been Discovered	Maeda Kohko	6
Report on the Interview for Prof.Dr.Erich Pauer	Maeda Kohko	10
Measuring the Direction of Mt.Fuji	Sakuma Tatsuo	14
" <i>Inoh Daizu Soran</i> " has been Completed	Editorial Department	21
Place Names Related to the Year of the Wild Boar	Saitoh Hitoshi	21
FROM VISITORS' REGESTERS Fujioka Shihoh, Katoh Taka'aki	Inoh Yoko	12
FEATURE ARTICLES:Branch Reports		
Tadataka's Breeze blew in the Noto Peninsula	Kawasaki Michiyo	22
Special Contribution : About the Novel " <i>Gunjo no Hito</i> "	Nohmi Ryuichiro	23
Hand-on Learning Experience with Wankarashin in Sanjo	Yamaura Sachiyo	30
A Visit to the Inoh Map of Taikodani-Inari Shrine	Ishikawa Seiichi	34
Spring Reports Eguchi Toshiko	Takekawa Yoshio	36
ARTICLES		
Two Partings Tadataka Encountered	Sugiura Morikuni	37
Inoh Tadataka as a Pioneer of Culture (4)	Miyauchi Satoshi	40
The Hamataku Miyauchi Family Documents (1) Mishima-Ezu	Miyauchi Satoshi	46
The Aizu Highway and InohTadataka	Matsumiya Teruaki	48
Mesurement of Longitude by Inoh Survey Team (2)	Sakuma Tatsuo	64
REGIONAL MATERIAL		
Inoh's Survey in Kumihama (1)	Matsuda Syoji	56
MEETING ROOM		
By a Curious Turn of Fate	Suto Ikuo	70
" <i>The Karatsu Highway</i> " has been Published	Nobu-Kobo	70
Analysis of Declination of This Year	Tsujimoto Motohiro	71
The People who Study Mathematics	Fujita Hiroshi	71
Daily Topics and Informations	Editorial Department	71

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY